

作家の態度

夏目漱石

青空文庫

演題は「創作家の態度」と云うのであります。態度と云うのは心の持ち方、物の観方みかたくらいに解釈しておいて下されば宜よろしい。この、心の持ち方、物の観方で十人、十色さまざまの世界ができましたさまざまの世界観が成り立つのは申すまでもない。一例を上げて申すと、もし諸君が私に向つて月の形はどんなだと聞かれれば、私はすぐに丸いと答える。諸君も定めし御異存はなからうと思う。ところがこの間ある西洋人の書いたものを見たら、我々は普通月を半円形のものとして解しているとあつたのみか、なぜまんまるなものと思つていぬかと云う訳までが二三行つけ加えてあつたんで、少し驚いたくらいであります。我々は教育の結果、習慣の結果、ある眼識で外界を観、ある態度で世相を眺め、そうしてそれが真しんの外界で、また真の世相と思つている。ところが何かの拍ひょうし子で全然種類の違つた人——商人でも、政事家でもあるいは宗教家でも何でもよろしい。なるべく縁の遠い関係の薄い先生方に逢あつて、その人々の意見を聞いて見ると驚ろく事があります。それらの人の世界観に誤ご謬びゅうがあるので驚ろくと云うよりも、世の中はこうも観られるものかと感心する方の驚ろき方であります。ちようど前に述べた我々が月の恰かつ好こうに対する考えの差と同じであります。こう云うと人間がばらばらになつて、相互の心に統一がない、極きわめて不安な

心持になります。その代り、誰がどう見ても変らない立場におつて、申し合せたように一致した態度に出る事もたくさんあるから、そう苦になるほどの混雑も起らないのであります。（少なくとも實際上）ジエームスと云う人が吾人の意識するところの現象は皆撰せんた択くへを経たものだと言ふ事を論じているうちに、こんな例を挙あげています。——撰択の議論はとにかく、その例がこの説明にはもつとも適切だと思ひますから、ちよつと借用して弁じます。今ここに四角があるとす。するとこの四角を見る立場はいろいろである。横たてからも、豎すいかいからも、筋違すじがひからも、眼の位置と、角度を少し変えれば千差万別に見る事ができる。そうしてそのたびたびに四角の恰好が違ふ。けれども我々が四角に対する考は申し合せたように一致している。あらゆる見方、あらゆる恰好のうちで、たった一つ。——すなわち吾人の視線が四角形の面に直角に落ちる時に映じた形を正当な四角形だと心得ている。これを私の都合の好いように言い換えると、吾人は四角形を観る態度においてことごとく一致しているのであります。また別の例を申しますと彫刻などで云う foreshorten ing と云う事があります。誰でも心得ている事でありませんが、人が手でも足でも前の方に出している姿勢を、こちらから眺めると、実際の手や足よりも短かく見えます。けれども本来はあれより長いものだと思つて見ています。だから画心のない吾々われわれが手や足を描こ

うとすると本来そのままの足や手を、方向のいかんにかかわらず、紙の上にあらわしたくなる。あらわして見るとどうも釣合がわるい。悪いけれども腹が承知をしないで妙な矛盾を感じる。小供のかいた画を見るとこの心持ちが思い切つて正直に出ています。これもこの際都合のいいように翻訳して云いますと、吾々が手や足の長さに対する態度はちゃんと申し合せたように一致していると云う事になります。

してみると世界は観様みようでいろいろに見られる。極端に云えば人々にんにん個々別々の世界を持つていると云つても差支さしつかえない。同時にその世界のある部分は誰が見ても一様である。始めから相談して、こう見ようじやありませんかと、規約の束縛めいめいを冥々めいめいのうちを受けている。そこで人間の頭が複雑になればなるほど、観察される事物も複雑になつて来る。複雑になるのではないが、単純なものを複雑な頭でいろいろに見るから、つまりは物自身が複雑に変化すると同様の結果おちいに陥るのであります。これを前の言葉に戻して云うと、世が進むに従つて、複雑な世界と複雑な世界観せかいけんができて、そうして一方ではこの複雑なものが統一される区域くわくも拡がひろつて来るのであります。

そこで作家も一種の人間でありますから各々めいめい勝手な世界観を持って、勝手な世界を眺めているに違ない。しかしながらすでに作家と云う名を受けて、官吏とか商人とか、

法律家とかから区別される以上は、この名称は単に鈴木とか、山田とか云う空名と見る訳には行かない。内実においてそれ相当の特性があつて他の職業と区別されているのかも知れない。だから、この人々の立場を研究して見たらば、多少の御参考になりはすまいかと思つてこの演題を掲げた訳であります。

そこで、この問題を研究する方法について述べますと、第一には歴史的の研究があります。これは創作家の世界観の纏まとつてあらわれた著作そのものを比較して、その特性を綜そ合ごうした上で、これに一種の名称（自然派とか浪漫派とか）を与えて、それから年代を追つてその発展を迹あとづけるのであります。いわゆる文学史であります。この間中からして、日本で大分自然派の論が盛になりましていろいろの雑誌にその説明などがたくさん出て、私なども大分利益を受けました。我々日本人が仏蘭西フランスの自然派はこう発達したの、独乙ドイツの自然派は今こんな具合だのという事を承知したのは、全くこの歴史研究の御蔭おかげで至極結構しごくな事と思ひます。

ただこの種の研究について私の飽き足らないところを云うと、あるいは下のような弊へいがありはすまいかと思われます。

(一) 歴史の研究によつて、自家を律せんとすると、相当の根拠こんきよを見出す前に、現

在すなわち新という事と、価値という事を同一視する傾かたむきが生じやすくはないかと思われま
 す。すべての心的現象は過程であるからして、Bという現象は、Aという現象に次いで起
 るのはもちろんであります。したがってBの価値はBの性質のみによつて定まらない、B
 の前に起つたAと云う現象のために支配せられている事ももちろんであります。腹が減る
 という現象が心に起ればこそ飯めしが旨うまいという現象が次いで起るので、必ずしも料理が上等
 だから旨かつたとばかりは断言できにくいのであります。そこで吾々はAと云う現象を心
 裡んりに認めると、これに次いで起るべきBについては、その性質やら、強度やら、いろいろ
 な条件について出来得る限りの撰せん択たくをする、またせねばならぬ訳であります。ちようど
 車を引いて坂を下りかけたようなもので前の一步は後の一步を支配する。後の一步は前の
 一步の趨すう勢せいに応ずるような調子で出て行かなければ旨うまく行かない。人間の歴史はこう云
 う連鎖で結びつけられているのだから、けつして切り放して見てもその価値は分りませ
 ぬ。仰ぎやう山さんに言うと一時間の意識はその人の生しょう涯がいの意識を包含していると云つても不条
 理ではありません。したがって人には現在が一番価値があるように思われる。一番意味が
 あるごとく感ぜられる。現在がすべての標準として適当だと信じられる。だから明日あしたにな
 ると何だ馬鹿馬鹿しい、どうして、あんな気になれたかと思う事がよくあります。昔むかし恋

をした女を十年たつて考えると、なぜまあ、あれほど逆上のぼせられたものかなあと感心するが、当時はその逆上がもつともで、理の当然で、実に自然で、絶対に価値のある事としか思われなかつたのであります。一国の歴史で申しても、一国内の文学だけの歴史で申してもこれと同様の因果いんがに束縛されているのはもちろんであります。現代の仏蘭西人フランスが革命当時の事を考えたら無茶だと思ふかも知れず。また浪漫派の勝利を奏したエルナニ事件を想像しても、ああ熱中しないでもよからうくらいには感ずるだろうと思ひます。がこれが因果であつて見れば致し方がない。ただ氣をつけてしかるべき事は、自分の心的状態がまだそんな廻り合せにならないのに、人の因果を身に引き受けて、やきもき焦あせるのは、多少他ひとの疝せ氣んきを頭痛に病むの傾かたむきがあるように思ひます。ところが歴史的研究だけを根本義として自己の立脚地を定めようとすると、わるくするとこの弊に陥り安やすいようであります。といふものは現に研究している事が自分の歴史なら善よかろうが人の歴史である。人はそれぞれ勝手な因を蒔まいて果を得て、現在を標準として得意である。それを遠くから研究して、彼の現在が、こうだから自分の現在もそうしなければならぬとなると、少し無理ができません。自己の傾向がそこへ向いていないのに、向いていると同様の仕事をしなければならぬ。云わば御都合になる。酷評を加えると自分から出た行為動作もしくは立場でなくって、

模倣もごうになる。物真似ものまねに帰着する。もとより我々は物真似が好きに出来上っているから、しても構わない。時と場合によると物真似をする方がその間の手数と手続と、煩瑣はんさな過程を抜きにして、すぐさま結局だけを応用する事ができるから非常に調法で便利であります。現に電信、電話、汽車、汽船を始めとして、およそ我国に行われるいわゆる文明の利器というものはことごとく物真似から出来上ったものであります。至極しごくよろしい。人に餅もちを搗かして、自分が寝ながらにしてこれを平げるの觀があつて、すこぶる痛快であります。がこの現象をすぐ応用して、文学などにも持つて行ける、また持つて行かなければならないと結論しては、少し寸法が違つてるように思います。と云うものは理学工学その他の科学もしくはその応用は研究の年代を重ねるに従つて、一定の方向に向つて発達するもので、どの国民がやり出しても、同程度の頭で同程度の勉強をする以上は一日早くやれば早くやつた方が勝になるような学問で、しかも一日後れたものは、必ず、一日早く進んだものの後あとを（一筋道である）通過しなければならぬ性質のものであります。歩く道が一筋で、さきが進んでいる以上は、こつちの到着点も明らかに分つてゐるんだから、できるだけ早く甲かぶとを脱いで降参する方が得策であります。真似をすると云うと人間ひとぎきが悪いが骨を折らないで、旨い汗うまを吸うほど結構な事はない。この点において私は模倣もごうに至極しごく賛成である。

しかし人間の内部の歴史になると、またその内部の歴史が外面にあらわれた現象になると、そう簡単には行きませんようです。風俗でも習慣でも、情操でも、西洋の歴史にあらわれたものだけが風俗と習慣と情操であつて、外に風俗も習慣も情操もないとは申されぬ。また西洋人が自己の歴史で幾多の変遷を経て今日に至つた最後の到着点が必ずしも標準にはならない。(彼らには標準であろうが)ことに文学に在つてはそうは参りません。多くの人は日本の文学を幼稚だと云います。情けない事に私もそう思つています。しかしながら、自国の文学が幼稚だと自白するのは、今日の西洋文学が標準だと云う意味とは違ひます。幼稚なる今日の日本文学が発達すれば必ず現代の露西亞ロシア文学にならねばならぬものだと断言できないと信じます。または必ずユーゴーからバルザック、バルザックからゾラと云う順序を経て今日の仏蘭西フランス文学と一様な性質のものに発展しなければならぬと云う理由も認められないのであります。幼稚な文学が発達するのは必ず一本道で、そうして落ちつく先は必ず一点であると云う事を理論的に証明しない以上は現代の西洋文学の傾向が、幼稚なる日本文学の傾向とならねばならぬとは速断であります。またこの傾向が絶体に正しいとも論結はできにくいと思ひます。一本道の科学では新すなわち正と云う事が、ある程度において言われるかも知れませんが、発展の道が入り組んでいろいろ分れる以上はま

た分れ得る以上は西洋人の新が必ずしも日本人に正しいとは申しようがない。しかしてその文学が一本道に発達しないものであると云う事は、理窟りくつはさておいて、現に当代各国の文学——もつとも進歩している文学——を比較して見たら一番よく分るだろうと思います。近頃のように交通機関の備った時代ですら、露西亜文学は依然として露西亜風で、仏蘭西文学はやはり仏蘭西流で、独乙ドイツ、英吉利イギリスもまたそれぞれに独乙英吉利的な特長があるだろうと思います。したがって文学は汽車や電車と違つて、現今の西洋の真似をしたつて、さほど痛快な事はないと思います。それよりも自分の心的状態に相当して、自然と無理をしないで胸中に起つて来る現象を表現する方がかえつて、自分のものらしくつて生命があるかも知れません。

もつとも日本だつて孤立して生存している国くに柄がらではない。やっぱり西洋と御付合をして大分ばた臭くさくなりつつある際だから、西洋の現代文学を研究して、その歴史的の由来を視て、ははあ西洋人は、今こんな立場で書いてるなくらいは心得ておかなかつちやありません。たとえ夢中に真似まねをするのが悪いと云つても、先方の立場その他を参考にするのはもちろん必要であります。文学は前申ぜんしたような特色のものではありませんが、その特色の中には一本調子うちに発達する科学の影響がたくさん流れ込んで来ますから、定数として動か

すべからざるこの要素が、いかに科学の進歩に連れて文学の各局部を冒おかしているかを見るのは、科学思想の発達しない日本人が、いたずらに自己の傾向ばかりふり廻めぐしては、分らないので、そう頑張がんばつていてはついに正宗の名刀で速射砲と立合をするような奇観を呈出するかも知れません。

して見ると歴史的研究は前のような弊もあるが、けっして閑却すべからざるものでありますから、私の希望を云うと、歴史を研究するならばその研究の結果して、綜そうごう合ごう的に現代精神とはこんなもので、この精神がないものはほとんど文学として通用しないものだと云う事を指摘して事実の上に証明したのであります。私の現代精神と云うのは、今月もしくは先月新らしくできた作物そのものについて、この作物は現代精神をあらわしている云々というような論じ方ではありません。過去一二世紀に渡つて、(もしくはもつと溯さかのぼつても、よろしい)、人の心を動かした有名な傑作を通覧してその特性(一つでなくてもよろしい。また矛盾併へいりつ立たしていても差さ支しかえない)を見出して行く事であります。そうすると一年や十年の流行以上に比較的永久な創作の要素がざつと明めい瞭りょうになるだろうと思ひます。少なくとも吾々の子もしくは孫時代までは変らない特性が出てくるだろうと思ひます。もし標準が必要とあるならば、これでこそ多少の標準ができるとも云い得るでしよ

う。こう云う手数をして現代精神を極めたからと云つて、それより以前に出たものには現代精神がないと云う訳にはならない。たとえばダンテの神曲に見えるような考を持っている人は今の世にはたくさんない。また神曲の真似まねをした作物を出そうと云う男もありますまい。しかしあの神曲のうちから、現代精神を引き出せばいくらでも出て来るにきまつている。今の人の心に訴える箇所はすなわち現代精神であります。デカメロンそのままを春陽堂から出版したつて読み手はないにきまつている。しかしあの中に現代精神すなわち種々な点において吾人を動かす自然派のような所はいくらでもあります。ずっと昔さかのぼに溯つてホーマーはどうです。全体から云うとむしろ馬鹿氣ている。誰もイリアッドが書いて見たいと云う人もあるまいが、そのイリアッドがやはり現代の人に読み得るところ、読んで面白いところ、読んで拍案の概があるところ、浪漫ロマンチック的なところ、が少なくともはなからうと思ふ。こう考えて見ると作物は時代の新旧ばかりで評をするよりも現代精神にリファーして評価すべき事となります。そうしてこの現代精神は実を云うと、読者がめいめい胸の中にもっている。ただ茫乎ぼうこぼくぜん漠然たるある標準になつて這入はいっているのだから、私の申出しはこの茫乎漠然たるものを歴史的の研究で、もつと明瞭に、もつと一般に通用するものにしたたいと云う動議にほかならるのであります。諸君の御存じのブランドスと云う人の書いた

十九世紀文学の潮流という書物があります。読んで見るとなかなか面白い。独乙ドイツの浪漫派だとか、英吉利イギリスの自然派だとか表題をつけて、その表題の下に、いくたりも人間の頭数を並べて論じてあります。これで面白いのでありますが、私が読んで妙に思ったのは、こう一題目の下に括くくられてしまつては括られた本人が押し込められたなり出る事ができないような気がした事です。英吉利の自然派はけつして独乙の浪漫派と一致する事は許さぬ。一点も共通なところがあつてはならぬと云わぬばかりの書き方のように感じられました。無論ブランドスの評した作家はかくのごとく水と油のように区別のあつたものかも知れない。しかしながら、こう書かれると自然派へ属するものは浪漫派を覗のぞいちゃならない。浪漫派へ押し込めたものは自然派へ足を出しちや駄目だと、あたかも先天的にこんな区別のあるごとく感ぜられて、後世の筆を執とつて文壇に立つものも截せつ然ぜんとどつちかに片づけなければならんかのごとき心持がしますからして、ちよつと誤解を生じやすくなります。さればといつてこの二派が先天的に哲理上こう違ちがうから微塵みじんも一致するものでないという理窟りくつも書いてなし、また理論上文芸の流派は是非こう分化するものだとも教えてくれない。ただ著者が諸家の詩歌文章を説明する条くだりを、そうですかそうでしかと聞いているようなものであります。しかしこれは少し困る。例たとえば学派を分けてあれば早稲田派だ、これは大

学派だとしてすましているようなものであります。それほど判然たる区別があるかないか分らないが、よしあつたにしても早稲田派と大学派は或る点において同じ説を吐いてはならないとお押しつけるのみか、たとい実際は同じ説でも、なに違つてるよ。早稲田だもの、大学だものただ名前だけできめてしまう弊が起りやすい。私の現代精神のそんごう綜合と云うのは、この弊を救うため、一方ではこの窮窟な束縛を解くと同時に、名にかの叶うたる実を有する主義主張を並立せしめようとするためであります。

けれども、こういう研究は私にはちよつと臆おつくうでなかなかできないから、歴史的に行くかと自然現代の西洋作家を実価以上にか買かい被かる弊へいが起りやすいだろうと思ひます。そこで歴史的研究以外の立場から創作家の態度を御話する事にしました。

(二) もう一つ歴史的研究に対して非難したいのは、ちと哲学者じみですが、こう云う事であります。すべての歴史は与えられた事実であります。すでに事実である以上は人間の力でどうする事もできない。儼げんとして存在しているから、この点において争うべからざる真であります。しかしながらこれが唯ゆい一の真であるかと云うのが問題なのであります。言葉を改めて云うと人類発展の痕こんせき迹はみんな一筋道に伸びて来るものだろうかとの疑問であります。もしそうだと云う断定ができれば日本の歴史すなわち西洋の歴史、西洋

の歴史すなわち希臘ギリシヤの歴史と云う事に帰着します。けれども多数の人は、これら各国の歴史を皆事実と首肯すると共に、ことごとく差違あるものと見倣みなすだろうと考えます。もつともこの各国の歴史から共通の径路を抽象して人類の発展の方向は必ず、こういう筋を通るものだと云われましょう。しかしそれだからといって日本も、支那も、英吉利イギリスも、ドイツも、同じ現象を同じ順序に過去で繰くり返かえしているとは参らるのであります。あまり雲を攫つかむような議論になりますから、もう少し小さな領分で例を引いて御話を致しますが、日本の絵画のある派は西洋へ渡つて向うの画家にはなほだ珍重されているし、また日本からはわざわざ留学生を海外に出して西洋の画を稽古けいこしています。そうして御互に敬服しあっています。両方で及ばないところがあるからでしょう。それは、どうしても善いが、日本の画を元のままで抛なげつておいて、西洋の画を今の通打うち遣やつておいたら、両方の歴史がいつか一度は、どこかで出逢であう事があるでしょうか。日本にラファエルとかヴェラスケスのような人間が出て、西洋に歌麿うたまろや北斎のごとき豪傑があらわれるでしょうか。ちと無理なようであります。それよりも適当な解釈は、西洋にラファエルやヴェラスケスが出たればこそ今日のような歴史が成立し、また歌麿や北斎が日本に生れたから、浮世絵の歴史がああ云う風になったと逆に論じて行く方がよくはないかと存じます。したがってラファエ

ルが一人出なかつたら、西洋の絵画史はそれだけ変化を受けるし、歌麿がいなかつたら、風俗画の様子もよほど趣が異なっているでしょう。すると同じ絵の歴史でもラファエルが出ると出ないとで二通り出来上ります。（事実が一通り、想像が一通り）風俗画の方もその通り、歌麿のあるなしで事実の歴史以外にもう一つ想像史が成立する訳であります。ところでこのラファエルや歌麿は必ず出て来なければならぬ人間であろうか。神のおぼしめ思し召しだと云えばそれまでだが、もしそう云う御幣ごへいを担かがずに考えて見ると、三分の二は僥ごよ倖うこうで生れたと云つても差さ支しかえない。もしラファエルの母が、ラファエルの父の所へ嫁とつに行く代りにほかの男へ嫁とついだら、もうラファエルは生れっこない。ラファエルが小さい時腕くじでも挫くじいたら、もう画工にはなれない。父母が坊主にでもしてしまつたら、やはりあれだけの事業はできない。よしあれだけの事業をしても生涯人に知らせなかつたらけつして後世には残らない。して見ると西洋の絵画史が今日の有様になつてゐるのは、まことに危うい、綱渡りと同じような芸当をして来た結果と云わなければならぬのでしよう。少しでも金かね合あが狂あえばすぐほかの歴史になつてしまふ。議論としてはまだ不充分かも知れませんが実際的には、前に云つたような意味から帰納して絵画の歴史は無数無限にある、西洋の絵画史はその一筋である、日本の風俗画の歴史も単にその一筋に過ぎないという事

が云われるように思います。これは単に絵画だけを例に引いて御話をしたのでありますが、必ずしも絵画には限りません。文学でも同じ事でありましょう。同じ事であるとする、与えられた西洋の文学史を唯一の真と認めて、万事これに訴えて決しようとするのは少し狭くなり過ぎるかも知れません。歴史だから事実には相違ない。しかし与えられない歴史はいく通りも頭の中で組み立てる事ができて、条件さえ具足すれば、いつでもこれを実現する事は可能だとまで主張しても差支ないくらいだと私は信じております。

そこで西洋の文学史を唯一の真と認めてかかるのは誤っている、私は申したいのであります。ただそれだけなら別にここに述べ立てる必要もない。いざとなると西洋の歴史に支配されるかも知れませんが、普通頭の中で判断すれば西洋の文学史と日本の文学史とは現に二筋であつて、両方とも事実で両方とも真であるのは誰が見ても分りやすい事でありますから、その辺はどうでも構いません。また一般に申して西洋の方が進んでいるから万事手本にするんだと言う人があつても構いません。私も至極御同感であります。ただ歴史の解釈を私のようにした上で、西洋を手本にしたら間違が少なからうと思うのであります。そうしないと弊が出てくる。そうしてその弊に陥つて悟らずにいる事があります。

たとえば十九世紀の前半に英国にスコットなる人があらわれて、たくさん小説をかきま

した。この人の作が一時期を画するような新現象であるために世人はこれをロマンチズムの代表者と見倣みなしました。それで差し支ないのですけれども、一度こういう風に推おし立てられると、スコットは浪漫主義で浪漫主義はスコットであると云う風にアイデンチファイされるようになります。アイデンチファイされると、スコットの作に見あらわれた要素はここごとく浪漫主義を構成するに必要でかつ充分 (necessary and sufficient) なものと認められます。なるほどスコットの作中には中世主義もあります、冒険談もあります。種々な意味に解釈される浪漫主義の特色を含んでおりますが、困る事には多少の写实的分子も交っているのです。ところが写実主義というものは別に旗幟きしを翻ひるがえして浪漫派の向むこうを張っているんだから、両々対立の勢のためにせつかくスコットのもっている写实的分子を引き抜いて写実派の中へ入れてやる事ができなくなってしまう。また写実派の中に散見し得る浪漫的分子を切り放して、浪漫派の中に入れる事も困難になってしまう。そこでこの名称のために誤あやまられて彼らの作品は精製した金や銀のように純粋な性質で自然に存在していると思うようになります。ところが実際は大概まざりものなのであります。だから本来を云うなら、ここに浪漫主義なら浪漫主義、自然主義なら自然主義の定義があつて、何人の作物でも構かまわないからして、この定義に叶かなつただけを持って来てこの主義のうちへ打ぶち込むの

が当然であろうと思われれます。例えば白なら白と云う属性の概念があつて、白墨、白紙、白旗、雪などという出来上つたものうちから白と云う属性だけを引き抜いてこの概念の下に詰め込むのが至当でありましょう。しかるにただ色だけが白いからと云つて、色の白いものは形や質や温度その他のいかに関せずことごとく白のうちへ入れて、しかも外へ出る事を許さなかつたら、統一のできるのは白という属性だけであるにも関せず、人はすべての点において統一されているかのごとく誤解を抱くのであります。白いものは白で區別しても差し支ないから、これと同時に、形や質の点においても區別して、一個の具体を二重にも三重にも融通の利くように取り扱わなくつては真相には達せられんはずであります。また一例を云うと、ここに一人の男がある。この人は学校へ出る。その時には教師の仲間へ入れて見なければなりません。筆を執る。その時には著作家の群に伍するものと認めるのが至当であります。家へ帰る。すると夫とも親ともして種別をしなければならぬ。この人は一人であるけれどもこれほどの種類へ編入される資格があるのであります。作物もその通りであります。これを分解し、これを綜合して、同一物のある部分を各適当な主義に編入するのが穩当であります。そんな錯雜した作物がないと云うのは過去の歴史だけを眼中に置いた議論でこれから先に作物の性質が、どのくらいに複雑な性質をか

ねてくるかを窺^{きわ}めない早計の議論かと思ひます。よし過去の作物だけについて検して見てもその作全体もしくははその人の作物総体がある一主義のもとに一括し得て妥当と認めらるほどの単調なものばかりはないはずであります。しかるに歴史に束縛されるとこの分類が旨^{うま}く行かない。なぜと云うと文学史で云う何々主義と云うのは理論から出たのでなくして、個人の作物から出たのであつて、その作物の大体を驚^{わしづか}攫^むみにして、そうしてもつとも顯著に見える特性だけを目懸^{めが}けて名を下したまでであります。元祖がすでにそうであるからして、継いで起るものの分類も、みんなこの格で何主義のもとに押し込められてしまふ。厳正な類別でなくつて、人別になつてしまふ。厳正な類別をやるには人を離れて、作をほごして、出来上つたものを取り崩^{くず}してかからなければなりません。因襲の結果歴史的の研究はこの方法を吾人に教えないのであります。つまりは幾通りとなく成立し得べき歴史のうちで実際に発展した歴史だけに重きを置いて、しかもほとんど偶然に出現した人間の作そのものを全^まき成^たいで取り崩^{くず}す事のできないものと見倣^{みな}した上でその特色の著るしきものだけに何主義の名をもつてする弊であります。だからこの際理論の方から這^{はい}入^りれば成立し得るあらゆる歴史に通用する議論が立てられますし、またはユーゴーとか、バルザックとか云う名前で代表している作物を、一^{ひとかた}塊^まりの堅牢体で、塊まりとして取り扱ふよ

りほかに手のつけられないものだと言ふ觀念を脱する便宜もあり、また從來實際に發展した歴史から出て来た何々主義より以外には主義は存在し得べからざるものであるとの誤解もなくなるだろうと思ひます。

(三) もう一つ歴史的研究についての危険を一言單簡に述べておきたいと思ひます。主義を本位にして動かすべからざるものと見ますと、前申した通り作家(すなわち作物)を取り崩してかからんと不都合が生ずるごとく、作家(すなわち作物)を本位として動かすべからざるものとする、今度は主義の方にもつて融通をつけなければなりません。融通をつけると云うと、一つの作物のうちには同時にいろいろな主義を含んでいる場合が多い、少なくとも含んでいる場合があり得るのですから、かような作物を批評したり分解したり説明したりする際には、一主義のもとに窮窟きゆうくつに律し去る習慣を改めて、歴史的には矛盾するごとくに見做されている主義でも構わないから、これを併立せしめて、いやしくもその作物のある部分を説明するに足る以上はこれを列挙して憚はばからんようにしなければ、やはり前段同様の不都合に陥る訳であります。しかし歴史的關係から作物はそれ自身に whole なものとして取り扱われておりますし、何主義と云う名はこの whole な作物を掩おほう名稱として用いられておりますから、妙な現象が起つて参ります。ここに甲の人があ

ってAと云う作物を出す。するとこの作物にB主義と云う名がつく。(多くの場合においてはこう一言に纏められないにもかかわらず)次に乙なる人が出て来てA'と云う作物を公けにする。すると批評家がAとA'の類似の点を認めて、やはりB主義に入れてしまう。あるいは作家自身が自らB主義と名乗る場合もありましょう。どちらでも同じ事でありま。第三に丙と云う男が出てA''を書く。A'とA''と似ているところからやはりB主義に纏められる。こう云う風にして、漸次にAnまで行つたとすると、どんなものでありましよう。甲と乙とは別人であります。乙と丙とも別人であります。別人である以上はいくら真似を仕合つたところで全然同性質のものができる訳がない。いわんや各自が本来の傾向に従つて、個性を發揮して懸つた日には、どこかに異分子が混入して来る訳になります。しかもこの異分子もまたB主義の名に掩われてしだいに流転して行くうちには、B主義の意味が一步ごとに摺れて、摺れるたびに定義が変化して、変化の極は空名に帰着するか、それでなければいたずらに紛々たる擾乱を文壇に喚起する道具に過ぎなくなりま。芭蕉が死んでから弟子共が正風の本家はおれだ我だと争つた話があります。なるほど正風の旗を翻えずのは、天下を挟んで事を成すようなもので当時にあつて実利上大切であつたかも知れませんがその争奪の渦中から一步退いて眺めたら全く無意味とし

か思われません。今私の申す弊は全く理知的の事で実利問題とは全く没交渉ではあります
 が、転々承継した主義を一徹に主張すると、少なくともその形迹けいせきだけは芭蕉以後の正風
 争いと同価値に終るようになりはせぬかと思われます。もつともこんな事は我々の日常よ
 くある事で、友人と一時間も議論をしているといつの間にか出立地を忘れて、飛んでもな
 い無関係の問題に火花を散らしながらごう毫も気がつかない場合は珍しくないようです。Aと
 A'とは似ている。だから双方共B主義でもまあよろしい。A'とA''とも似ている。だ
 から双方共まあB主義でよろしい。降くだつてAn-1とAnとを比較するとやはり似ている。
 だから双方とも依然としてB主義で差さ支しないさしつかえようなものの、最初のAと最終のAnを
 対照した時に始めて困る。何だかB主義では足りないような心持がします。スコットの浪
 漫趣味とモリスの浪漫趣味とは大分違うようです。モリスはチョーサーに似ていると云い
 ます。そのチョーサーは詩人ではあるが写真派と云う方が適当であります。すると浪漫主
 義を中世主義と解釈せぬ以上はスコットとモリスとを同じ浪漫派に入れるのが妙になつて
 来ます。今度はモリスとゴーチエを比較する。誰が見ても同じ範疇はんちゆうでは律せられそう
 もない。それでも双方共浪漫家で通用しています。ある人の説によると仏蘭西フランスの自然派は
 浪漫派を極端まで発展させたもので、けつして別途の径路をたどるものではないと申しま

す。そうになると自然派は浪漫派の出店みたようなものになってしまいます。イブセンを捕まえて自然派だと云う人があります。どうもイブセンとモーパサンとはいっしょにならないように思われます。そうかと思うとイブセンを浪漫派だと申す人があります。しかしイブセンとユーゴーとはどうてい同じ畠はたけのものじゃないようであります。要するに二三の主義をどこまでも押し通して、あらゆる作物をどっちかへ片づけようとする無理から起つたものじゃないかと考えられます。イブセンならイブセンを本位として、説明するには、在来の何々主義（しかもそのうちの一つ）で足りると思うのは、また足りなければならぬと思ひ定めてかかるのは、やはり歴史的研究の弊を受けたものではなからうかと愚考致します。それで少々出立地を変えて見たら、この窮屈を破ると同時にこの曖昧あいまいをも幾分か避けられるだろうと思ひます。

(四) もう一つ申して本題に入るつもりであります、これは純粹なる歴史的研究とは云えないかも知れません。今まで述べた三カ条はみな文学史に連続した発展があるものと認めて、旧を棄すてて漫みだりに新を追う弊とか、偶然に出て来た人間の作のために何主義と云う名を冠して、作そのものを是非この主義を代表するように取り扱った結果、妥当を欠くにもかかわらずこれをあくまでも取り崩くずしがたき whole と見倣みなす弊や、あるいは漸移ぜんいの

勢につれてこの主義の意義が変化を受けて混雑を来す弊を述べたのであります。ここに申す事は歴史に関係はありますが、歴史の発展とはさほど交渉はないように思われます。すなわち作物を区別するのに、ある時代の、ある個人の特性を本として成り立った某々主義をもつてする代りに、古今東西に涉つてあてはまるように、作家も時代も離れて、作物の上のみあらわれた特性をもつてする事であります。すでに時代を離れ、作家を離れ、作物の上のみあらわれた特性をもつてすると云う以上は、作物の形式と題目とに因つて分つよりほかに致し方がありません。まず形式からして作物を区別すると詩と散文とになります。これは誰でも知っている事で改めて云うほどの必要も認めません。詩と散文と区別したからと云つて創作家の態度がちよつと髣髴しにくいのです。分けないよりむしろかも知れないが、分けたところで大した利益も出て来ないようです。次に問題からして作物の種類別をすると、まず出来事を書いたものを叙事詩（これは希臘の作を土台にして付けた名だから、我々は叙事文と云つても構いません）と名づけたり。自己の感情を詠じたものだから抒情詩（これも抒情文としてもよろしい）と申したり。性格を描いたり、人生を写したりするんで、小説とか戯曲とかの部類に編入したり。あるいは静物を模写するんで叙景文と号するような分類法であります。この分類になると多少細かになりますから、詩

と散文の区別より幾分か創作家の態度を窺う事ができて、ずいぶん重宝ではあります。これとても与えられた作物を与えられたなりに取り扱うだけで、その特性を概括するにとどまつてしまいやすいから、それより以上に溯つて、もう少し奥から、こう云う立場で、こう変化すると小説ができる、こう変化すると抒情詩ができるとまでは漕ぎつけていないのが多い。そこまで漕ぎつけない以上は、頭から、結果と見られべき作物を棄てて原因と認めべき或物の方から説明して、溯る代りに、流を下つてくる方が善い訳になります。つまり角があるから牛で、鱗があるから魚だと云う代りに、発生学から出立して、どんな具合に牛がで、どんな具合に魚ができるかを究めた方が、何だか事件が落着いたような心持が致します。

私が創作家の態度と題して、歴史の発展に論拠を置かず、また通俗の分類法なる叙事詩抒情詩等の区別を眼中に置かないで、単に心理現象から説明に取りかかろうと思うのはこれがためであります。

それで創作家の態度と云うと、前申した通り創作家がいかなる立場から、どんな風に世の中を見るかと云う事に帰着します。だからこの態度を検するには二つのものの存在を仮定しなければなりません。一つは作家自身で、かりにこれを我と名づけます。一つは作家

の見る世界で、かりにこれを非我と名づけます。これは常識の許すところであるから、別に抗議の出よう訳がない。またこの際は常識以上に溯さかのほつて研究する必要を認めませんから、これから出立するつもりであります。今申した我と云うものについて一言弁じて後の伏線を張っておきたいと思ひます。もつとも弁ずると申しても哲学者の云う『Transcendental』だの、心理学者の論ずるEgoの感じだのというむずかしい事ではありません。ただ我と云うものは常に動いているもので（意識の流が）そうして続いているものだから、これを区別すると過去の我と現在の我となる訳であります。もつともどこで過去が始まつて、どこから現在になるんだと議論をし出すと際限がありません。古代の哲学者のように、空を飛んで行く矢へ指をさして今どこにいると人に示す事ができないから、必ひつきよう 竟矢は動いていないんだなどという議論もやれなくてもありません。そう、こだわつて来ては際限がありませんが、十年前の自分と十年後の自分を比較して過去と現在に区別のできないものはありませんから、こう分けて差し支さつかえないだろうと思ひます。そこで——現在の我が過去の我をふり返つて見る事ができる。これは当然の事で記憶さえあれば誰でもできる。その時に、我が経験した内界の消息を他人の消息のごとくに観察する事ができる。事ができると云うのですから、必ずそうなると云うのでもなければ、またそう見なくてはならない

と云うのでもありません。例えば私が今日ここで演説をする。その時の光景を家へ帰つてから寝ながら考えて見ると、私が演説をしたんじゃない、自分と同じ別人がしたように思う事もできる——できませんか。それじゃ、こういうなあどうでしょう。去年の暮に年が越されない苦しまぎれに、友人から金を借りた。借りる当時は痛切に借りたような気がしたが、今となつてみると何だか自分が借りたような気がしない。——いけませんか。それじゃ私が小供の時に寝小便をした。それを今日考えてみると、その時の心持は幾分か記憶で思い出せるが、どうも髯ひげをはやした今の自分がやったようには受取れない。これはあなた方も御同感だろうと思います。なお溯さかのぼりますと——もうたくさんですか、しかしついでだから、もう一つ申しましょう。私はこの年になるが、いまだかつて生れたような心持がした事がない。しかし回顧して見るとたしかに某年某月の午うまの刻か、寅とらの時に、母の胎内から出産しているに違いない。違いないと申しながら、泣いた覚もなければ、浮世にょいの臭もかいだ気がしません。親に聞くとたしかに泣いたと申します。が私から云わせると、冗じょう談だん云つちやいけません。おおかたそりや人違いでしょうと云いたくなります。そこで我々内界の経験は、現在を去れば去るほど、あたかも他人の内界の経験であるかのごとき態度で観察ができるように思われます。こう云う意味から云うと、前に申した我のうちにも、

非我と同様の趣で取り扱われ得る部分が出て参ります。すなわち過去の我は非我と同価値だから、非我の方へ分類しても差し支ないと云う結論になります。

かように我と非我とを区別しておいて、それから我が非我に対する態度を検査してかかります。心理学者の説によりますと、我々の意識の内容を構成する一刻中の要素は雜然^ぼ彪^{ぼう}大^{だい}なものでありまして、そのうちの一点が注意に伴^つれて明^{めい}瞭^{りょう}になり得るのだと申します。これは時を離れて云う事であります。前に一刻中と云ったのは、まあ形容の語と思つていただけばよろしい。例えば私がこの演壇に立つてちよつと見廻わすと、千余人の顔が一度に眼に這^{はい}入る。這入つたと云う感じはありますが、何となく同じ顔で、悪く云うと眼も鼻も揃^{そろ}つていない人が並んでおいでになる。あながち私が度胸が据^{すわ}らないで眼がちらちらするばかりではない。こう、漠^{ぼく}然^{ぜん}たるのが本来で、心理学者の保証するところであります。しかしこの際は不幸にして、別段私の注意を惹^ひくものがないから、ただ漠然たるのみで、別に明瞭なるところがありません。もし演壇のすぐ前に美しい衣装^{いしやう}を着けた美しい婦人でもおられたら、その周囲六尺ばかりは大いに明瞭になるかも知れませんが、惜しい事においでにならんから、完全に私の心理状態を説明する訳に参りません。そこでこの漠然たる限界の広い内容を意識界と云つて、そのうちで比較的明瞭な点を焦点と申し

ます。これは前^{ぜん}申した通り時間の経過に重きを置かない simultaneous の場合であります。時間の経過上についても同様の事が申されます。しかしこれを説明するとくどくなりますから略します。また想像で心に思い浮べる事物もほぼ同様に見^み倣^なされるだろうと考えますから略します。それから前に申した例は単に分りやすいために視覚から受ける印象のみについて説明したものでありますから、実際は非常に区域の広いものと御承知を願います。

まず我々の心を、幅のある長い河と見立ると、この幅全体が明らかかなものではなくって、そのうちのある点のみが、顕著になって、そうしてこの顕著になった点が入れ代り立ち代り、長く流を沿うて下って行く訳であります。そうしてこの顕著な点を連^{つら}ねたものが、我々の内部経験の主脳で、この経験の一部分が種々な形で作物にあらわれるのであるから、この焦点の取り具合と続き具合で、作家の態度もきまる訳になります。一尺幅を一尺幅だけに取らないで、そのうちの一点のみに重きを置くとすると勢い取捨と云う事ができて参ります。そうしてこの取捨は我々の注意（故意もしくは自然の）に伴って決せられるのでありますから、この注意の向き案^{あんばい}排^{はい}もしくは向け具合がすなわち態度であると申しても差^{さしつかえ}支^{つか}ななかりうと思えます。（注意そのものの性質や発達はここには述べません）私が先年倫^{ロンドン}敦^敦におった時、この間亡^なくなられた浅井先生と市中を歩いた事があります。そ

の時浅井先生はどの町へ出ても、どの建物を見ても、あれは好い色だ、これは好い色だ、と、とうとう家へ帰るまで色尽しておしまいになりました。さすが画伯だけあって、違つたものだ、先生は色で世界が出来上がつてると考えてるんだなど大に悟りました。するとまた私の下宿に退職の軍人で八十ばかりになる老人がおりました。毎日同じ時間に同じ所を散歩をする器械のような男でしたが、この老人が外へ出るときつと杓子しゃくしを拾つて来る。もつとも日本の飯杓子めししゃくしのような大きなものではありません。小供の玩具おもちゃにするブリツキ製の匙さじであります。下宿の婆さんに聞いて見ると往来に落ちてゐるんだと申します。しかし私が散歩したつて、いまだかつて落ちていた事がありません。しかるに爺さんだけは不思議に拾つて来る。そうして、これを叮嚀ていねいに室の中へ並べます。何でもよほどの数になつておりました。で私は感心しました。ほかの事に感心した訳でもありませんが、この爺さんの世界観が杓子から出来上つてるのに慚すくなからず感心したのであります。これはただに一例であります。詳しく云うと講演の冒頭に述べたごとく十人十色で、いくらでも不思議な世界を任意に作つてゐるようであります。中にもカントとかヘーゲルとかいう哲学者になるとどうてい普通の人には解し得ない世界を建こんりゆう立りゆうされたかのごとく思われます。こう複雑に発展した世界を、出来上つたものとして、一々御紹介する事は、とてもでき

ませんから、分りやすいため、極めて単純な経験で一般の人に共通なものを取って、経験者の態度がいかに分岐して行くかと云う事を御話して、その態度の変化がすなわち創作家の態度の変化にも応用ができるものだと言う意味を説明しようと思ひます。極めて単純な所だけ、大体の点のみしか申されませんが、幾分か根本義の解釈にもなるうかと存じて、思い立つた訳であります。

まず吾人の経験でもつとも単純なものは sensation であります。近頃の心理学では、この字に一種限定的の意味を附して、ある単純なる全部経験の一方面をあらわす事になっておりますが、私は便宜べんぎのため全部経験の意義に用ひます。ただ便宜のために用ひるのでから、実際の衝突のない事は私の説明を御聞になれば御分りになるだろうと思ひます。それからある心理学者は sensation は分解の結果到着する単純な経験で、現実な吾人の経験はもつと複雑なところから始まつているじやないかと云つてるようですが、それも構いません。ただ sensation が単純な経験をあらわせば、私の目的には宜よろしいのであります。もし不都合なら、そんな字を借用しないでもよろしい。面倒な事を云わないで、例でもつて御話をすれば、早く合点がてんが行かれますから、すぐさま例に取りかかります。

時々酒問屋さかじんやの前などを御通りになると、目暗縞めくらじまの着物で唐棧とうさんの前垂まえだれを三角に、

小倉の帯へ挟んだ番頭さんが、蕪被りの飲口をゆるめて、樽の中からわざわざかばかりの酒を、もつたいなそうに猪口に受けて舌の先へ持つて行くところを御覧になる事があるでしょう。商売柄だけに旨い事をするなど見ていると、酒の雫が舌へ触るか、触らないうちにぷつと吐いてしまいます。そうして次の樽からまた同じように受けて、同じように舌の先へ落しては、次へ次へと移つて行きます。けれども何遍同じ事を繰り返しても決して飲まない。飲んだら好きそうなものですが、ことごとく吐き出してしまいます。そこで今度は同じ番頭が店から家へ歸つて、神さんと御取膳か何かで、晩酌をやる。すると今度は飲みますね。けつして吐き出しません。ことによると飲み足りないで、もう一本なんて、赤い手で徳久利を握つて、細君の眼の前へぶらつかせる事があるかも知れません。まずこの二た通りの酒の呑み方（もつとも一方は呑み方ではない、吐いてしまうから吐き方かも知れませんが）——吐き方なら吐き方でもよろしい。この呑み方と吐き方を比較して見ると面白い。研究と申すほどの大袈裟な文字はいかがわしいが、説明のしようによると、なかなかえらく聞えるようにできますから御慰みになります。まず第一には、御店で舐めた酒と、長火鉢の傍でぐびぐびやった酒とは、この番頭にとって同じ経験であります。もつとも焼酎とベルモット、ビールと白酒では同じ経験とも申されませんが、

同種、同類、同価の酒を店で吐いて、家で飲んだとすれば、吐くと飲むとの相違があるだけで、舌の当りは同じ事だと見るのが順当だから、つまりこの男は同じ味覚の経験を繰り返した訳になります。ここまでは誰が見ても同じ経験であります。それならどこまでも同じだろうかと云うと、違っています。店で試しに口へ当てて見るのは、この酒はどんな質で、どう口当りがして、売ればいくらぐらいの相場で、舌触りがぴりりとして、後が淡泊して、頭へぴんと答えて、灘か、伊丹か、地酒か濁酒かが分るため、言い換えれば酒の資格を鑑別するためであります。これが晩酌の方で見ると趣が違います。そりや時と場合によると、今日の酒は大分善いね、一升九十銭くらいするねくらいの事は云いながら、舌をぴちやぴちや鳴らすかも知れませんが、何も九十銭を研究している訳でも何でもありません。だから九十銭が一円でもただ旨く飲めさえすりや結構なんです。こういう点から云うと、両方が変わっています。酒の味を利用して酒の性質を知ろうというのが番頭の仕事で、酒の味を旨がって、口舌の満足を得るといのが晩酌の状態であります。双方とも同じ経験に違いがない。ただその経験の処置が異なっています。言葉を換えて云うと同様の経験について、眼の付け所が違う、注意の向け方が違っている。最後にこの講演に大事な言葉を用いて申しますと、態度が違っております。(こここのところが少しヴントな

どと違つてるかも知れません。ヴントのような専門の大家に対して異説を立てるのははなはだ恐縮ですが、私のは、こう行かないと説明になりませんから、こうしておきます。またこうしても、實際上差さしつかえ支つかないと信じます)

もう一步進んで、この態度が違つていと云う事を説明しますと、番頭の方は酒の味を外へ抛なげ出す態度であります。すなわち自分の味覚をもつて、自分以外のもの、(最前申した非我)の一部分を知る料に使うのであります。譬ひゆ喩で云うと、酒の味が舌の先から飛び出して、酒の中へ潜ひそんで落ち着く方角に働くのであります。晚酌の方はこれが反対の方向に働いております。非我のうちに酒と云うものがあつて、その酒が、ある因いん縁ねんで、外から飛び込んで来て、我を冒おかした、もしくは我が冒おされたと承知するのであります。詰つづめて云うと、一は我から非我へ移る態度で、一は非我から我へ移る態度であります。一は非我が主、我が賓ひんという態度で、一は我が主、非我が賓と云う態度とも云えます。番頭から云うと酒の味自身が酒の属性になるのだから、これを属性的の経験とも云えましょう。晚酌から云うと酒の味が自己の幸不幸(あまり大袈裟おおげさなら快不快)になるんだから感受的とも云えましょう。洋語で云うと affective と申したら妥当だろうと思ひます。あるいは番頭の、自己にあらざる酒に重きを置く点から云えば客観的態度とも名づけられましよう

し、晩酌の、自己に受くる刺激を、密切な自己の一部分と見倣^{みな}す点から云えば、主観的とも申されましよう。または番頭の態度が非我を明らかにめようとする態度であるから、主知主義と云つて善^よかろうと思ひますし、晩酌の態度が、我に感ずる態度であるから、主感主義と云つて善^よかろうと思ひます。(ここに云う両主義は便宜のため私が拵^{こしら}えたのだから、かの心理学の一派を代表する主意説とは切り離して見ていただきたい)

これだいてい御分りになつたろうと思ひますが、なお念のために、もう少し複雑で時間の経過を含んでいる例を御話ししておきたいと考えます。かつて西洋の石版業の事を書いたものを見た事がありますが、その中に彼らの技巧は驚ろくべきものだとありました。なぜ驚ろくべきものかと申すと、彼らは原面を一目見るや否や、この色とこの色を、これだけの割合で、こう混ぜれば、この調子が出ると、すぐに呑^のみ込んでしまふ。それからその通りにやる、はたしてその通りの調子が出る。まずこんな具合なんだそうです。ところが画工の方はどうかと云うと、まず腹の中で、ここへこんな調子を出して、面白味を付けようと思う。それから絵の具を交せる——もしイムプレシヨニストなら単純な色を並べて、すぐに画布へ塗り付ける。そうして思い通りの調子を出す。今この兩人を比較して見ますと、ある手段に訴えて、目的(すなわち思い通りの色)に到着するのだから、そこまでは

同じ事と見倣みなして差支さしつかえないのです。しかし兩人が工夫の結果同じ色彩に到着しても、到着した時の態度は大に違ふと云わなければなりません。画工の方はこの色彩を楽しむのであります。いい effect が出たと云つて嬉うれしがるのであります。この樂みを除いては、いろいろの工夫を積んでこの結果に達するまでの知識は無用なのであります。しかしこの知識をある意味において自得していないと、どうあつてもこの結果が出せない。出せなければ樂しむ訳に參らんからやむをえずこの過程を冥々めいめいのうちにあるいは理論的に覚え込むのであります。しかるに、石版屋の方では、注文を受けて原画と同じような調子を出せば、それで万事が了するので、その結果が網膜もうまくを刺激しようが、連想を呼び起そうがいっこう構わなので、必竟ひつきようずるに彼の興味は色彩そのものに存するのであります。何と何と何がどんな割合に調合されてこの色彩が出来上つたんだなど見分けがつけばよろしいのであります。したがつて彼の重んずるところは色彩から受ける樂たのしみよりも、いかにしてこの色彩を生じ得るかの知識もつと纏まとめて云えばこの色彩の知識にあると云つても無理ではありません。さてこの兩人も出来上つた色を経験すると云えば同じ經驗をしたに違ひない。ただ石版屋の方はこの經驗を我から放出して、非我の属性たる色と認め、かつ属性として他の色と區別するに引き易かえて、画家は同一經驗を、画面より我に向つて反射きたし來つたる

一種の刺激と見做し、この色がいかに我を冒すかの点にのみ留意するのであります。だから石版屋の方を客観的態度で主知主義とし、画工の方を主観的態度で主感主義と名けてよからうと思ひます。

まずこれで客観、主観、主知、主感の解釈ができましたが、これは極めて単純なる経験について云う事で、その経験は一の全き経験でありますから、この経験に対する注意の向け方、すなわち態度一つで、こう両面に分解はできますようなものの、この両極端の態度を取つて、いずれへか片づけなければならぬように人間が出来上つてゐると思ふのは中庸を失した議論であります。分りやすいためにこそ、こう截然たる區別はつけましたが、こう明瞭に離れる場合は、あらゆる場合の両端に各一つずつしかないと合点して中間ではなからうと思ひます。その中間に横つてゐる多数の場合は皆この両面を兼ねてゐるでしょう。もし兼ねてゐるのが不都合ならば或る比例において入り交つてゐると云うが好いでしよう。

そうすると私は、何だかいらざる駄弁を弄した、独りよがりの心理学者のようになりません。それでは少々心細いから、もう少しこの両方面を研究して御話したいと思ふ。すなわちこの単純な経験において両面を區別しておく方が適當であると御納得の参るよう

この両面が漸々右と左へ分れて発展する結果ついには大変違つたものになりうると云う事を説明したいと思ひます。

説明はなるべく単簡な方が宜ろしいから、ここに一つの物でも、人でもあるとする。この物か人は与えられたものとしませう。すると、以上の両態度でこれに対すると、これを叙述する方法が双方共にどう発展するかという問題であります。

その前にちよつと御断わりをしておきますが、ここではAならAを与えてあると見て、その与えられたAをいかに叙述して行くかと云うのですから、叙述家にAを撰択する権利がない事になります。しかしながら前に我々の心を幅のある河に喩えた時、この川幅の一点だけが明瞭になるから、明瞭になつた一点だけが意識の焦点になつて、他は皆茫々^{ぼうぼう}の裡に通過してしまふ。そうしてその焦点は注意のもつとも強い所にできる、そうして注意はすなわち態度であると申しました。だから心の態度は撰択淘汰の権を有しておきます。ここにAを与えられたとするのは、心の態度にAを撰択する権利がないと云う意味ではありません。すでに撰択せられたるAについての話であります。

本来ならば前に申した両態度がいかなる風に、いかなる性質の焦点を作るかを論じなければならぬはずであります。しかしそうすると大変複雑な問題になりますし、また撰択の

態度は、すなわち撰択されたものを叙述する態度と同じ事で、双方とも傾向に相違はないと考えます。前に云った色好きの浅井先生のような人に、エストミンスター・アペーが眼に着いたとすると、先生は自分の勝手にこの寺院を撰択した訳になりますが、さてこれを叙述する段になれば（腹の中で叙述しても、口で叙述しても、または筆で叙述しても）撰択した時の態度をもつて細かに局部に向うだけの事があります。ただ叙述の際にある連想だとか、ある概念だとかある記号だとかアペー以外の材料をもつて来て、アペーの色を説明するかも知れませんが、説明の道具に使われる材料もまた同じ態度で撰択したものでありますから、つまりは同じ事だろうと思えます。（もつとも例外は出て来ます。態度が途中で代る事もあり得ます。しかしこれは些細ささいの事として御見逃しを願いたい）

そこでAを与えられたものと見て、これを叙述する様子がだんだんに分れて遠ざかるところだけを御話しをしたい。Aそのものは何だか分らないのですが、これを叙述する方法は主知（客観）の態度に三つ、主感（主観）の態度に三つ、そうして両方を一つずつ結びつけて対つひにする事ができるかと思えます。当っている当っていないはもちろん大切であります、比較すると、よく対がとれているところに私は興味があるのでありますし、叙述となるとすでに文学の領分に、いつの間にか這入はいっておりますから、私の思いついたまま

を御参考に供します。

第一段は叙述が、一步客観主観の両面へ展開した時の状態で、この左右の扉を対と見るところに興味があるのであります。この時期における客観的叙述を私は perceptual と名づけようかと思ひます。すなわち前に申した酒の味よりもやや複雑な感覺的屬性が纏まつて一体を構成しているものを、綜そうごう合された一体と認めて、認めたままを叙述する意味に用いるつもりであります。例たとえばここに洋卓テーブルがあると、この洋卓は堅い、黒い、ニスの臭においのする、四角で足のある、云々と一々にその屬性を認めて、認めた屬性を綜そうごう合して始めて叙述が成立する訳であります。ところがかように屬性を結びつけると云う事が、前に申した酒の味るときよりも一層客観性をたしかにする事だろうと思われまふ。と云うものは視覚、聴覚その他を単に主観的態度で取り扱つていると色はついに色で、音はどこまでも音で、この色とこの音は同一体の非我が兼ね有していると云う事實には比較的無頓着むとんじやくでいられます。したがつて色も非我の屬性であり、音も非我の屬性であると云う以上に、この色もこの音も同一非我の屬性であると綜合すれば、前よりは一段とその物の存在たしを確かにする意味になるから、客観的態度に重きを置いた叙述と云わねばなりません。ただ注意すべき事はこの際主観的分子が無くなつたと解釈してはならないのであります。現に色を視、

音を聞く以上は、この経験を綜合して我以外に抛なげ出すと、抛なげ出さざるとに論なく、色も音も依然として、一方では主觀的事実であります。

これで私のいわゆる Perceptual な叙述の意味は大概御分りになりましたらう。ところが、属性が複雑になるに従つて、叙述が長たらしくなります。長たらしくなると、叙述をする当人も迷惑であり、叙述を聴くものは一度に纏まとめかねるようになります。したがつてこの叙述を簡単にするためには、勢い叙述されべき物に類似のもので、聞く人の頭の中に、すでに纏はつて這入はいつているものを持ち出して代理をさせるのが便利になります。例えば柀かきを見た事のない西洋人に柀を説明するよりも赤茄子あかなすのようだと話す方が早解りがするようなものであります。もちろんこの代理になる赤茄子の考が先方の頭のなかになくは駄目で、考がある以上は、その考え次第では、第二段に述べる conceptual な叙述を予想した事になります。これはその場合に至つてなるべく都合のないように説明してみましよう。とかくにこの代理のものをを用いると云う事は、純粹の叙述ではない、方便であるから、あまり厳密に考えると少しは破綻はたんが出さうであります。しかし實際的にはほとんど、私の主意を害する事のないのみか、かえつて私の考を明瞭に御分らせ申す結果になりますから、こう致しておきたい。のみならず、こうしておく、片一方の主觀的の方と比較するとき

大変な好都合になるのであります。

そうすると、帰着するところは、perceptualな叙述のもつとも簡便な形式は洋卓テーブルは唐とう机づくえのごとしとか、柿は赤茄子のごとしとか、驢ろは騾らのごとしとか、すべて眼に見、耳に聞き、手に触れ、口に味わい、鼻に嗅かいで得たる形ぎようそ相そうをもつて叙述する事になります。その一般の形式をAはBのごとしとしておきます。

Perceptualな叙述に対する、主観的方面の叙述は何であるかと云うと、私はちよつと名前に窮するから、しばらく在来の修辞学に用いている直ちよく喩ゆ (simile) という語を借用致します。しかし全然従来の simile とも思われないうですから、そのつもりで聞いていただきたい。普通修辞学者の説によると、似たものを似たもので説明するんだそうです。これだけならば柿を赤茄子で説明したり、洋卓を唐机で説明するのは別段の相違もないようです。ところが実際の例を見ると、大分これとは趣を異にしているのがあります。あの人の心は石のようだ。あの男は虎のようだ。などと云うのがあります。そこでは私は第一段の主観的叙述をあらわすに simile と云う字を借用しました。これは普通 simile の下に取り扱われている叙述のあるものが、私のいわゆる第一段の主観的叙述と同傾向を有しているからと云うだけに過ぎません。さて今申した、あの人の心は石のようだと云う例をとって、

調べて見ると、心と石を並べても比較しようがありません。またあの男は虎のようだと云う例にしてもその通り、虎と人間とはとうていいっしょになりようがない。けれども別に無理とも思わないで使っています。してみるとどこか似たところがあるに違ない。その似たところを考えて見たらこの両面の叙述の差が判然するだろうと思います。人の心を石に比較するのには、比較にならないように思うのは、我々が石についての経験を、我から非我の世界に抛^なげ出す態度、すなわち我以外に一塊の動かすべからざる石と名づくるものが存在している^{みな}と見倣^{みな}すからではありますまいか。すでに抛^なげ出されて石と名づけられたる以上、私の態度が我から非我に向つて働らく以上は、石はどこまでも石で、どうしても人の心に比較されよう訳がないのであります。我々の石についての経験は堅いとか、冷たいとか、素^そ気^けないとかいう属性から構成されているのは無論であります。いやしくもこの属性が石の属性で、石の意義を明瞭ならしむるものと相場がきまってしまう^きえば、もう融通は利^ききません。どうしても石を離れる事ができなくなります。石を離れる事ができないとすると、まるで性質の違った心を形容する訳には参りません。堅いのは石が堅いので、冷たいのもやはり石が冷たいんだから、その堅さ冷さを石から奪^なつて、心に与える訳には参りません。しかしひとたび立場を変えて、その堅さ冷たさを石から経験したとすれば、自分が石を認

めたんでなくって、石が自分を冒したとすれば、冷たいのは自分の冷たさで、堅いのも自分の堅さであるから、ひとたび石の経験に触れるや否や、石を離れて冷たい、堅いと云う心持ちだけになるから、いやしくもこれと同じ心持を起すものならば、移して何へでも使う事ができます。それで、あの人の心は石のようだと云う叙述が意味のあるものとなりません。これは全く性質の違った比較をする場合で、むしろ極端であります。比較するものと比較されるものとの属性が一点もしくは一以上の諸点において、似ていれば似ているだけ客観的比較に近づく訳ですからして、漸々 perceptual の叙述に縁がついて参ります。例えば先刻のあの人は虎のようだというような simile でも石と心の比較に比べると、幾分かは perceptual の方面へ向いております。なぜと云うと、虎は動物であり、人も動物であるという点において、すでに客観的価値のある比較であります。何も動物と云う概念がなくとも構いません、寝るところが似ている、物を食うところが似ている、歩くところが似ている以上は、客観的価値があります。いくら皮膚が似ていなくっても、足の恰好が似ていなくっても、髯の数が似ていなくっても、似ているところがあるだけ客観的価値のある比較であります。しかしながら、もし以上の点において類似を主張するならば、よりよき類似を主張する比較物はいくらでもあるはずであります。例えばあの人は父に似

ているとかまたは母のごとしか云う方が虎のごとしか云うよりも遙かに穩当おんとうでありま
 す。立派な perceptual な叙述ができるはずであります。しかるにこれを棄すてて客観的価値
 のもつとも少ない虎を持つて来たのは、すべての不類似のうちに獐猛ねいもうの一点を撰択して
 もつとも大切な類似と認めたからであります。さてこの撰択は前に云った通り我々の注意
 できまるので、云い換えると我々の態度で決せられるのであります。ではこの際の態度は
 客観か主観かと云う問題になります。獐猛ねいもうを客観的に虎の属性と見倣みなせば獐猛ねいもうはついに
 虎の獐猛であつて、どうしても虎を離れる事はできません。その代り人間の獐猛ねいもうもまた客
 観視する事ができますからして双方共我を離れたものとして比較ができます。しかし同一
 経験の方向を逆にして虎より受くる獐猛ねいもう、人より受くる獐猛ねいもうとして、双方から来る心持だ
 けを比較すると、主観の態度であります。だからこの場合においては、両方に見る事がで
 きて、両方共正しいのであります。しかしながら実際はどうかと云うと、個人の習慣及び
 その時の模様によつて、変化のあるのは無論であります。多くの場合に、多くの人が、
 多く主観の方に重きを置いているように思われます。だから私はこの種の比較に用いる虎
 なら虎を、客観的価値のもつとも少ないものであると云う訳で、また客観的価値のある局
 部をも主観的態度で注意する傾向があると云う訳で、この方面の叙述と見るのであります。

石の例と虎の例でも分るごとくすでに主観の程度には厚薄があります。なお進んで月が鎌のようだと云う叙述に至るとまた一步 perceptual の方へ近づいております。(面倒だから解剖は致しません)。かようにして漸々客観的価値を増すに従って、ついには perceptual の叙述に達するのであります。

Perceptual の叙述と、simile (私のいわゆる) との対はまずかようなものであります。前者は客観で知を主とし、後者は主観で感を主とするのが特性であります。しかし常態を申すと双方が幾分か交り合っている事は、例に因よつて説明した通であります。

これから第二段の対に移ります。第二段の片かた扉びらで客観態度の方を conceptual な叙述と名づけたと思います。それから片扉の主観態度の方をやはり在来の修辞学の言葉を借りて metaphor としておきます。意味はこれから説明します。

あるものを二度見てははああれだなど合点するのを recognition と申します。二度以上たびたび見て、やっぱりあれだなど承知するのを cognition と申します。もし一つものをたびたび見る代りに同種類の甲乙をたびたび見た上で、やはり同種類の丙へいに逢あつた時、これはこの種類の代表者もしくはその一つであると認めるのは conception の力であります。隣りの斑ふちはこうであった。向うの白はこうであった。どこそこの犬はこうであったの経験

が重なる、すべての犬はこうであったと纏まとめて参ります。それがもう一層固まると、こ
 うであったが変じて、かくあらねばならぬとまで高じて参ります。かくあらねばならぬと
 なった時に、犬なら犬全体に通じての考ができます。かくあらねばならぬ考だから、本人
 はまだ見ぬ犬にも、いまだ生れぬ犬にもこれを適用致します。さてこの概念を抱いだいて往来
 を歩いていると、たちまちわんと吠えられる事があります。当人はさっそくにははあ鳴い
 たな。これ犬なりと断じます。私はこのこれ犬なりの叙述を conceptual な叙述と申したい
 のであります。犬は一匹であります。耳が垂れて、尾が巻いて、わんわん云う声を出して
 いるかも知れません。しかし単にそれだけ見たり聞いたりしただけでは、種属全体に通用
 する犬と云う断案は出て来ません。だからこの際における犬は、頭の中に前から存在して
 いる犬の一匹もしくは代表者であります。固もとより頭のなかに這入はいっている犬は、犬と云う
 名前で這入っているか、または抽象的な関係的知識になって這入っているだけだから、形
 を具えてはおりません、形を具えている犬はいつでも代表的な一匹の犬になってしまふの
 は無論であります、個々特別の場合を綜そうごう合して成立つたものであるという点において、
 すでに密かな主観的意味を失っております。personal element が亡なくなっております。犬
 はかくあるべきものという事を云い換えると、すべての人は犬をかく考うべきはずだとい

う事になります。すなわち他人はどうでも自分はこうという立場を離れております。誰にでも通用するもの、結局は客観的にたしかなものという事になります。それだから犬の概念は頭の中にあるだけにもかかわらず、その価値は頭以外すなわち非我の世界に抛なげだ出されて始めて分るものであります。その代り例の主観的な分子は、perceptualの叙述に比べると全く欠乏して参ります。ただ吾人の知識が非我の世界において広くなつたと云う事は云われます。けれども犬と云えば、すぐに一匹の犬を思い出すのが通例であるから、理窟りくつからいうほど主観的分子は欠けていない場合が多いので、その点においては第一段の perceptualな叙述とつながっております。（この場合においてもこれは犬なりというのほもつとも単簡なる形式を撰えらんだものであります）。

今度は対ついの片扉なる主観の方面すなわち metaphorに移つて申します。これは御承知の通り simile の変化したもので、修辞学者は大胆なる simile と評しております。あの人の心は石のようだと云う代りに、あの人の心は石だと断じ、あの人は虎だと云い切る類たぐいであります。第一段の比較に対して、ここでは心を石と同一視し、人を虎と同一視するのであります。だから simile よりも一層客観的不類似の点を無視した訳になります。だからその点において一層主観的態度の叙述と見倣みなして差支さしつかえありませんまい。（その他の点は simile

の所と同様の議論でありますから略します)

第三段になると妙な対ができると思います。ここになると双方共が象徴に帰してしまうのであります。本来を云うと、犬と云うのも記号で、心を石だと云うのも一種の象徴でありますから、第三段になって正式にあらわれるのはすでに前から胚胎はいたいしておったものであります。客観の態度から出る象徴の、もつとも面白い例は数字の記号であるものを代表する事であります。例えば $x^2 + y^2 = r^2$ とあればこの関係で円を叙述する事になるそうです。私の知っている数学者はこの式さえ見れば円が眼に浮ぶと云いました。恐ろしいものです。しかしこの式の意味を解しても、円が眼に浮ぶようになるのはちよつと暇がかかるだろうと思われます。それから $x = A \cos 2\pi nt$ は一種の振動をあらわしたり、 $\lambda = 597\mu$ とあると光波の長さで光の色をあらわすのだそうで、まことに不可思議の至のように思われますが、いずれも長くかかつて説明すべきものを、手数はぶを省くために、かようにつづめたものであります。だから比較的に非常に込みいった、客観的關係が畳み込まれているには相違ありません。それがためこれらを了解する非我の世界における知識は大分広く深くなるでありましょうが、その代り我が自身だけに關する経験すなわち主観の部分は全くないと云つても差し支ありません。ただし $x^2 + y^2 = r^2$ はいかな円でも円でさえあればあ

らわしているのだから、取も直さず円とりなおの概念に当ります。のみならずある人はこの式を見ればすぐに一個の円が眼に浮ぶと云うのですから、この人にとっては、この公式は *perception* 的な叙述の代りにもなります。まことに重宝な式であります。しかしいかな数学好きの友人もこの式を見て好い心持だとか不愉快だとか申さない所をもって見ますと、主観的方面の叙述とはほとんど縁がない式のように思われます。これから翻ひるがえつて主観の方の象徴を述べます。これは歴史的に申すと、私の知らない仏蘭西フランスの詩人や何かを引用しなければなりませんので、少々迷惑致します。しかし前もって申し上げた通り、これは文学史上の御話でないのだから、相成るべくは手製の例で御勘弁をお願いしたいと思います。つまりは、この態度にかなっていれば、どんな例でも構わんくらいで御聞き下さい。すでにあの人の心は石のようだと云つても、あの人の心は石だと云つても、石をもって心を代表するという点から見ますと、やはり主観方面に属する一種の象徴に違ありません。けれども、それが一歩進んで、心と石を並べないで、石と云つてすぐ心を思い起させる叙述に至ったときに、私はこれを始めて第三段の主観的象徴と申したいと思えます。もちろん形式はこの叙述に叶かなつていてもいっこう主観の分子を含んでおらんのがありますがそれは御注意を致しておきます。例えば茶柱が来客を代表したり、嚏くさめが人の噂うわさを代表したりするようなもので

あります。これは偶然の約束から成立した象徴でありますから、ここに云う種類には属しない訳であります。もつとも器械的の象徴も馬鹿にならんもので、習慣の結果茶柱を見て来客の時のような心持になったり、嚏をして、人の噂を耳にするような気分が起る人がないとも限りません。そう云う人にはこんな象徴もやはり主観的価値のあるものであります。だから本人の気の持ちよう一つでは、仁にんじん参が御三どんの象徴になって瓢ひょうたん箆が文学士の象徴になつても、ことごとく信心がらの鯛いいわしの頭と同じような利目ききめがあります。なお進むと、鳥鳴からすなきが凶事の記号になったり、波の音が永劫えいこうをあらわす響と聞えたり、星の輝きが人間の運命を黙示する光りに見えたりします。こうなると漸々主観的価値が増してくるのみならず、解剖の結果全く得手勝手な象徴でないと云う事も証明ができます。このくらいならばまだ、大した事はありません。第二段第一段とつながっているくらいのものであります。層々展開して極端に至ると妙な現象に到着します。ちよつとその説明を致します。我々は我々の気分（主観の内容）を非我の世界から得ます。しかし非我の世界は器械的法則の平衡を待つて始めて落ちつくものであります。もしこの平衡を失えばすぐに崩くずれてしまいます。したがって自分がこういう気分になりたいと思つた時に、その気分を起してくれる非我の世界の形相そなわが具つておらん事があります。つまり非我の世界を支配する

器械的法則が私の氣分に應じて働いてはくれません。そこでこの法則の運行と、自分の氣分と合体した時、すなわち自分がかくなりたいたかねがね希望していたかのごとき氣分を生ずるときの非我の形相を、常住の公式に翻譯しようとするのが我々の欲望であります。例えば時ほとし鳥とぎす平安城を筋違すじかいにと云う俳句があります。平安城は器械的法則の平衡を保つて存在しているのだから、そうむやみに崩れてはしません。それすら明治の今日には見る事ができません。いわんや時鳥は早い鳥であります。またその鳥が筋違に通るところも、始しじゅう終ゆうはありません。おやといううちに時鳥も筋違も消えてしまいます。消えてしまう以上はその時の氣分になりたくつてもちよつとなれないから、平安城を筋違にという瞬間の働きをさも永久の状態のごとく、保存に便にするように纏まとめておきます。さてかように纏まとつた氣分が（客觀的に云うと形相）だんだん頭のなかへ溜たまつて参ると仮定します。そうしてそれが入り乱れるとします。広くなり深くなると見ます。すると一種奇妙な氣分になります。この氣分を構成する一部一部は、非我の世界にこれに相應する形相を発見しもしくは想像する事ができますが、この全体の氣分に應じたものを客觀的に拈ねん出しゅつしようとするとうてい駄目であります。花でも足りない。女でも面白くない。ああでもない、こうでもない、ともがくようになります。これを形容して、よく西洋人などの云う口調を

借りて申しますと、無限の憧憬しやうけい (infinite longing) とかになるのでしょうか。私は昔し大学におった頃この字を見て何の事だか分りませんでした。それでもありがたがってふり廻していました。今でも実は分りません。私は解釈だけではできませんが、本当のところ infinite longing と云うものを持っていないのだから、是非もございません。しかし私のように説明すればともかくも形容の詞ことばなのですから、それで差さしつかえ支ごございますまい。とにかく、そんな形容を使わなければならぬ気分が起りまして、煩悶はんもん致します。煩悶してどうか発表したいとするが発表できない。できないでしまえばそれまでであります。せめて不完全ながら十の一でもあらわそうとすると、是非とも象徴に訴えなければなりません。十のものを十だけあらわさないで——あらわさないと云つては間違になります。あらわせないのです。でやむをえず一だけにしてやめておく叙述であります。無論気分を気分としてあらわすなら、大に悲しいとか、少々嬉うれしいとか云うだけで、始めから表わせる表わせないの議論をする必要がないのですが、この深いような、広いような、複雑なような気分の対象を、客観的なる非我の世界に見出そうとすると十の気分を一の形相で代表させて、残る九はこの象徴を通じて思い起すようにしなければなりません。しかしながら元來これは本人すら無理な事をしているのですから、他人にはよほど通用しにくくなる訳であります。

す。一を聞いて十を知ると云う事がありますが、一を見て十を感じる人でなければできない事です。しかも一を見て十を感じる、その感じかたが、云いあらわした本人と一致しているかどうかに至るとはなはだむずかしい問題であります。要するに象徴として使うものは非我の世界中のものかも知れませんが、その暗示するところは自己の気分であります。要するにおれの気分であつて、非常に厳密に言うと他人の気分ではない、外物の気分では無論ない。という傾向のあるところから、この種の象徴を主観的態度の第三段に置いて、数学の公式などの対と見立てました。(シモンズの仏蘭西フランスの象徴派を論じた文のなかに、こんな句があります。「我々が林中の木を一本一本に叙述するの煩はんを避けて、自然を怖おそれて逃がれんとするがごとくもてなすと、ますます自然に近くなります。また普通の俗人は日常の雑事を捉とらえて実在に触れていると考えておりますが、これらの煩瑣はんさな事件を掃蕩そうとうしてしまつと、ますます人間に近くなるものであります。世界に先さきつて生じ、世界に残るべき人間の本体に近づくものであります」この人はまたカーライルの語を引用しています。「真正の象徴は明らかにまた直接に、無限をあらわしている。無限は象徴によつて有限と合体する。眼に見えるようになる。あたかも達せらるるかのごとくに見える」この二人の言葉は多少 infinite longing と同じく、いささか形容の言葉のようにも思われます

が、御参考のために、ここに引いておきます）

これで主観客観の三対併せて、六通りの叙述の説明を済ませました。そこでこれだけ説明すればあらゆる文学書中に出て来るすべてのものを説明し尽したとはけっして申すつもりではありません。しかしながらこれだけ説明すれば、吾人の経験の取扱い方の一般は分るだろうと思います。客観主観の両態度の意味と、その態度によって、叙述の様子がだんだんに左右へ離れて行く模様が分るだろうと思います。それが普通の人の分れ具合でまた創作家の分れ具合であります。だからつまるところは創作家の態度も常人の態度も同じ事に帰着してしまいます。何だつまらない、それがどうしたんだとおっしゃる方が、あるかも知れません。なるほどつまらない。私もつまらないと思います。しかしここまで解剖して見て始めてつまらない事が分ったので、それまでは私も諸君と同じようにいっこう不得要領であったのです。しかしつまらないながらもこういう事だけは云い得るようになります。この六通りの叙述は極端から極端までずうとつながっています。どこで、どれが終つて、どこで、どれが始まったと云う事ができないように続いています。それをほかの言葉で翻訳すると、客観主観いずれの態度にしても、このうちの一と通りに限らねばならないという理由もなし、また限つたが便利だという事もなし、その時その場合で変化しても

差さ支つかないのみならず、変化するのが順当で、変化しなければ窮きゆう窟くつであると云う事だけはたしかのように思われます。もつとも客観の極端に至ると科学者だけに通用する叙述になり、主観の極端になると、少数の詩人のみに限られる叙述になりますから、例外になります。しかし常人はこの両極の間を自由勝手にうろろしているものであります。そうして創作家もまた常人と同じようにその辺のいい加減な所を上下しているものであります。

そこで、かの西洋の文学史に起った何派もしくは何主義というものは、その傾向から推して、これらの客観的態度の三叙述、もしくは主観的態度の三叙述の左右へ排列されるものだろうかと思ひます。まず写実派、自然派、のようなものは前者に属し、浪漫派、理想派などと云うものは後者に属するのではなからうかと思ひます。私はこれらの諸派を歴史的に研究して、こんなものだと断定するではありません。私が創作家の態度を極端まで左右に展開させてその傾向を確かめると、西洋にはこういう派がある、ああいう派があるという話だから、それならばその性質を大略聞いて見て、それならば、私の解剖した両翼の方へその派の名前を結びつけて排列してみよう、見ればこう左右に割って置かれはしないかというまでであります。したがって私はこの解剖によって、歴史的に起った自然

派や浪漫派の定義を下す意は毛頭ありません。すなわちこの左右の両翼が自然派もしくは浪漫派とアイデンチカルのものという考はまるでないであります。私は心理状態の解剖から出立する。だからできるだけ単純にまたできるだけ根本的に片づけ得るように解剖して来たのであります。しかるにかの自然派もしくは浪漫派と名^{なづ}けるものはその中に含まれたる多くの書物の特性をあらわしておつて、大分複雑であるのみならず、その内容を形づくっている文章がすでに純粹に何々派をあらわしておらんから、とうてい私の展開させた両翼と全然一致しようがないのであります。けれども大体の傾向を云えば、こう分布排列しても無理はないと思います。

ところで普通の人間は今申す通り、この両極端の間をうろついております。そのみならず、この六通りのうちの一叙述をえらんだところで、えらんだのは当人で、これを聞くものまたは読むものはその隣りの叙述と受取るかも知れません。例えば月が眉^{まゆ}のようだという叙述を本人は perceptual と思つて述べていても、聞く人は simile と受取るかも知れません。第三者がこれを見て、どっちが間違つていても評されません。双方共正しいとしなければなりません。そこでこう云う事は云われなんでしょうか。自然派と浪漫派とは本来の傾向から云うとやはり左右に展開しているようですが或るところになると、どつちと

でも解釈ができるもので、要は読者の態度いかんによつて決せられるものだと言ふ事は。一句や二句の例ではありません。ちと比例を失するような大きな例になるかも知れませんが、ちよつと御判断を願うために御話を致します。独乙ドイッで浪漫主義ロマンチスムの熾さかんに起つた時、御承知ごしょうちの通り、有名なカロリーネと云うシュレーゲルの細君こぎみがありました。この細君こぎみが夫おつとの朋とも友うゆうのシエリングと親しい仲になりました、とうとう夫と手を切つて、シエリングといつしよになります。しかもその時この女は自分の手紙のうちに、縁はこれにて切れ申候もうこう。始めより二世かけてとは固もとより思い設けず候と書きました。しかもシュレーゲルといつしよになつたのがすでに二度目なのですから、シエリングの所へ行くと三度目の細君になるのです。それで亭主の方はどうかと云うと、離婚を申し込まれた時は侠きやうき氣きを起してさつそく承知したのみならず、離別後も常にシエリングと親密な音信をしていたそうであります。もう一つこんな御話があります。東京近傍しゆくの在ですが、ある宿しゆくに一軒の荒物屋あらかものやがあります。て、荒物屋の向うに反物屋かきものやがありました。ところがその荒物屋の神かみさんが、どういう仔細しさいか、その家うちを離別致して、すぐ向うの反物屋へ嫁よめに行つたそうです。それで、嫁よめに行つた明くる日から、店先すわへ坐つて、もとの亭主と往來へだを隔へだてて向きあつてゐるんだそうです。私にこの話をして聞かせたものはあさましいと云わぬばかりな顔をして、田舎いなかのもの

のは呑気のんきなものだと云つて笑つていました。この二つの話を取つて調べて見ますとよほど似ております。しかし前のは浪漫派の中心で起つた事で、後のは——何派だかちよつと困りますが、まあ自然派の作にでもありそうに見えます。しかし事實はどうしても同じなんだから致し方がない。それじゃ同じものが、どうして浪漫派になつたり、自然派になつたりするんでしょう。まあ説明するとこんな訳じゃありませんか。浪漫派の人は主觀的傾向に重きを置くもので、愛はその傾向のもつとも顯著なるものでしたがつてもつとも神聖なものであります。愛と云う分子があればこそ結婚とか夫婦同棲どうせいとかいう形式の内容に意味がある訳だから、この内容がなくなる以上は、どんな形式だつて構やしません。三下りみくだ半はんを請求する方もその覚悟、やる方もその了りようけん見だから双方共洒然しゃぜんとして形式のためわづらに煩わづらわされないのであります。ところが反物屋の方になると愛に重きを置いた出来事かも知れないが、始めから愛のない結婚で出て引いても同じ事なのかも知れない。それほど解釈するにしても、我々はそう云う動機を見るのじやない、普通の約束的の徳義を破壊した行為だという点を認めるのであります。徳義を棄すてた露骨の人性かもしくは野性がそのまま出た所作しよさくだと見るのであります。カロリーネの方は離縁かみしたり結婚したりするのを善い事、美しい姿と思つてやるのです。反物屋の神かみさんはそんな事を考えちゃ——まあ

いないでしょう。だから見るものの方でも、そんな人間もあるかね、はあそうかねと一つの事実として認めるのであります。だからこの二つの話を叙述する時には、ただ叙述する時の態度が違うのであります。ところがさつき申した通り「眉まゆのような月」と云う叙述が、どっちの態度にもなる訳ですから、この結婚問題の叙述もまたどっちの態度にも受け取られるかも知れない。いくら反物屋の神さんを書いても主観的の叙述だと人が読むかも知れず、カロリーネの嫁入事件を写しても客観的の叙述だと解されなとも限りません。して見ると自然派と浪漫派もある場合には、客観主観の叙述が合し得るごとくに合し得るものと見ても差さ支しないつかえ、かと思えます。（もつともこれは一句や二句の叙述でありませぬから、「眉のような月」のように、きつぱりとは参りませぬ。ただ両態度の傾向を推おして極端まで持つて行つた御話ですからその辺は御斟酌ごしんしゃくを願います）

これは一つの態度が両様に認められ得ると云う例でありますが、もう一つ前節の最初に申した我々の態度は常に両極の間をぶらついて、いるもので、けっして片つ方づけられるものでないと云う事を御話をしてそれから、議論の歩を進めたいと思ひます。これも分りやすいためになるべく単簡たんかんに通俗な例で説明致します。普通用談の際は無論雑談の際でも、我々は滅多めったに主観的な叙述を用いてはいないと思つています。詩的な、浪漫的な句は

筆を執つて紙にでも咏懐の辞を書き下す時に限るようには考えています。ところが実際は大違で、談笑の際始終この種の叙述をやっております。腹の虫が承知しないなど云うのもその一つであります。腹のなかに虫はおりません。よしおつたところで、承知しない虫はおりません。承知しない虫がいたって誰が相談なんかするものですか。あるいは腹が立つと申します。腹が立つと云つたつて、元来坐りもしない腹が立ちようがないじやありませんか。あるいは眼が廻るとも云うようですが、今日までまだ眼玉の廻転している人に逢つた事がありません。それにもかかわらず三句とも皆通用しています。これは皆主観的態度で話し主観的態度で聞いているのであります。この態度で話せばこそ、聞けばこそ通用するのであります。大袈裟に云うと御互が浪漫派だから合点ができるのであります。簡單を尊んで、短かい句だけで説明しましたが、もっと長くなつても精神に変わりはありません。この態度で行く方が大分便利な事があります。その代り徹頭徹尾浪漫派ではやはり辟易します。「君富士山へ登つたそうじやないか」「うん登つた」「どんなだい」「どんなの、こんなのでつて大変さ」「どうして」「まず足は棒になる、腹は豆腐になる」「へえー」「それから耳の底でダイナマイトが爆発して、眼の奥で大火事が始まつたかと思うと頭蓋骨の中で大地震が揺り出した」こんな人に逢つたらたまりません。少々気が触れて

るんじゃないかしらといささか警戒を加えたくなくなります。してみると、我々の文句長く云えば叙述はやつぱり前に説明した六通りの中間を左へ出たり右へ出たりして好い加減に都合の好いところで用を足しているに違ない。創作家もやつぱりその通りであります。論より証^{しようこ}拠自然派でも浪漫派でも構わないから、一冊の本を取つて来て、一句ごとに五六頁順々に調べて見ると分ります。浪漫的な句はたくさん出て来ます。浪漫的な句が嫌な人だつて、腹を立てちやいけない、眼が廻つては怪しからん、是非腹の虫を殺してしまえとまで主張する人はないでしょう。浪漫派の書物もその通り、けつして、のべつ浪漫づくめでは済まないのです。諸君は、あるいは、そりやただ句の話じゃないか、一篇一章もその議論で行けるかいと御尋ねになるかも知れません。さよう一篇一章一卷となると私も少し困却致します。しかし降参する必要もないだろうと思ひます。と云うのは私の考では一句でも叙述、二句でも叙述、三句続いても叙述の気なので、しかもその叙述には前に説明したような種類以外の叙述すなわち回想とか批判とかいうものまでも含められるだけ含めるつもりなのですから、応用はこれで思つたよりも存外広いのであります。

ここで一步進めます。客観的態度の三叙述を通じて考えて見ますと、いずれも非我の世界における（冒頭に説明したごとく我も非我と見^{みな}做^なす事ができますが）ある關係を明かに

する用を務めております。知識を与うるのが主になっております。だからして一言にして云うと真を發揮するのが本職であります。本職と云う意味は、同時に主観的内職もできると云うつもりで用いた言葉であります。もしこの内職がある程度まで併行していなければ、この種の叙述の価値は大分減じます。大学の教授が私立大学をやめると収入がよほど違うようなものであります。現に真専門の $x^2 + y^2 = 12$ 氏のごとぎに至っては、ほとんど文学を休めて、理学の方で月給を貰わなければ立行かん姿であります。ただ真を本職とする創作家のために都合の好い事は真そのものに付着している別途の感情を有している事でもあります。例えば（前の例で説明して見ますと）柿は赤茄子のごとしと云うと無論 simile を内職の内職くらいにしておりますが、本職は固より柿の性質を明かにするためです。柿を葡萄や梨と区別するためであります。今柿を赤茄子で説明すると、その説明がうまくできたかできないか、よく柿をあらわし得たか得ないか、うまい比較物をもって来たか来ないか、柿と赤茄子が実によく似ている似ないで、はあなるほどと思う程度が大分違います。このはあなるほどが何時でもいろいろな程度で食つ付いて廻るのであります。simile の方でもこのはあなるほどは無論必要でありますが、それは内職で、本業を云うと、石の冷たさ堅さを自得して、その自得した気分で人の心を感じるのでありますから、石と人の心を

比較してどこまで妥当なりや否やはむしろ第二義の問題かも知れないのであります。柿と赤茄子の例はもつとも簡単なものでありますが、もう少し複雑になると、このはあなるほどだけで一篇の小説ができます。(因果律を發揮した場合)。これに反して馬琴ばきんのような小説は主観的分子はいくらでもありますが、この方面の融通が利きかないから、つまりは静御前しずかごぜんは虎のごとしなどと云う simile を使っているようなもので、ついに読む事ができなくなるのであります。君の云うはあなるほどはなるほど分つたが、そりややはり主観じやないかと云われるかも知れない。そうだと申すよりほかに致し方がないが、これは客観的關係を明めるにつけて出るので、似る、移る、因が果になる等の事実を認めて感心した時の話であつて、すでに明らめられたる客観的關係を味うのとは方向が違うのであります。三勝半七酒屋さんかつはんしちよかやの段だんというものを知らないから、始めて聞いて見てははあと感心するのと、もう一遍酒屋を聞いて来ようかと出かけて、ははあと感心するのとは、同じ感心でも、性質が違います。この客観的に非我の關係を明めるにつけて生ずる付属物を intellectual sentiment と云います。付属物とは下等なものという意味ではありません。否むしろこの方が文学の領域内では必要なものであります。しかし客観的態度を主として、眞の發揮ついはに追ついで起るものでありますし、かつは創作家の態度を主観(主感)、客観(主知)と分

けた以上は、今またこの intellectual sentiment を主観の部に編入するといたずらに混雑を引き起しますからやはり附屬物としておきます。それでも少し混雑して御分りにくいかも知れません。私の説明の下手なところは御託おわびを致します。（場合に依つては intellectual sentiment と云うのがあまり仰おぼ山やまでありますが面倒だから、これですべてを兼ねさせます）

客観すなわち主知の方は以上の通りであるが、主観すなわち主感の方はと申すと、真を發揮するに對して、美、善、壯に對する情操を維持するか涵養かんようするか助長するのが目的であります。この三者の解釈は詳しく述べる事ができません。美と云う事を大きく解すると、善も壯も掩おほつても構いません。のみならず真をさえ包んでもいいでしょう。それは人の勝手であります。受持の範圍をきめて名をつけるだけの事であります。私はごく單純に耳目を喜ばす美しいもの、美しい音くらいで御免蒙ごめんこうむります。もつとも美醜を通じて同範圍のものを入れます。善もその通り善惡を通じ含ませるのみならず、直接に道徳に關係のない希望とか、愛とかいうものも入れるつもりです。壯は意志の発現（発現でなくつても発現のポテンシャルチーを認めた時も無論入れます）に對する情操を入れます。上は壯烈もしくは壯大より下は卑劣もしくは繊弱に至るまで入れます。するとこれは前の善の範圍

に或所まで入り込みます。すべての感情が多くの場合において意志を促がすもの、または意志に変化する傾向のあるものとの学説に従えば、この二範はんちゆう 疇ちゆう はある点においていっしよに出合うものでしようが、壯とは行為所作しよさく に対するこちらの受け方を本位として立てたので、善とは善悪その他の諸情そのものに対するこちらの受け方を本位として立てた、範疇のつもりであります。御相談では片っ方へ編入してもよろしゅうございます。それから人間の所為を離れていわゆる物質界に意志の発現もしくはそのポテンシャルチャーを認めた場合には、この意志は変じて物理上の energy のようなものになります。少なくとも人間の意志とは趣を異にして参ります。かように壯の発現もしくは潜伏が物質界に移るとすると、美の範疇と接近して参ります。それ故時宜によつては、これも美のなかへ押し込んでも構いません。まず不完全ながら善、美、壯、の解釈はこうと致して、この三者に対する私の受け方を叙述するのがこの方面の文学の目的であります。ところが私の受け方は千差万別に錯雑して参りますが、総括すると快不快の二字に帰着致します、好悪の二字に落ちて参ります。すなわち善に逢あつて善を好み、悪を見て悪を悪にくみ、美に接して美を愛し、醜に近づいて醜を忌いみ、壯を仰いで壯を慕い、弱を目して弱を賤いやしむの類であります。固もとより善、美、壯の考は人により時により、相違はあります、また、三が冒おかし合わないとも

限りますまい。現に前に述べたカロリーネの話でも愛に従うのを善とすれば、あの話を讀んで充分満足の気分になれましょうし、また夫おつとに従うのを善とすれば、どうも不快な話になります。しかしどう浮世が引ひつ繰くり返かえつても、三者に対する情操のない世はないはずで、いかに無頓着むとんじやくな人間でもこの点において全然好悪を持っていない人はありません。もしあれば社会が維持できないばかりであります。一歩進んで云えば社会は改良できない訳であります。器械的の改良すなわち法律が細かくなるとか巡査の数を殖ふかす事はできませんが、肝心かんじんの人間の行為を支配する根本の大部分を閑却して世の中が運轉する訳がありません。これがために、これらの情操を維持し、助長する事を目的にする文学が成立するのであります。

私は客観主観両方面の文学の目的とするところを一言述べました。ここに目的と云うのは叙述家自らが、叙述以前にかかる目的を有しておらなければならぬという意味ではありません。その結果だけがこう云う目的に叶かなつていただけでもいつこう差さ支つかないのであります。我々が結婚するようなもので、何も必ず子を産む了りようけん見で嫁を貰うとは限りません。しかし事實は多くの場合において、あたかも子を産む事を目的にして結婚をしたように見えます。さればといつて子孫を作る目的で嫁を貰つてならぬと云う理由もありません。

んから、結果が同じならどうでも構わないでしょう。私はこの目的を眼中に置かないで、おのずからこの目的に叶うかなような述作をやる人を art for art 派の芸術家と云いたいと思います。俗に art for art 派と云うと何だか、ことさらに道徳を無視する作家のみを指すようですが、たとひ道徳的情操を鼓吹こすいしたつて、始めから、この目的を本位として、述作にとりかからずに、出来上った結果だけがおのずからこの目的にかなっていたらやはり art for art の作家かと思えます。ユーゴーの攻撃のごときは固もとより歴史的にああいう必要もあつたのでしようが、私のように解釈したらあれほど議論をする必要もなからうと思えます。同時に最初から一定の目的をもつて出立したつて構わない訳かと存じます。普通この立場を非難する人の説はこうなんだろうと思えます。作そのものが芸術家の目的であるのに、作以前にある目的を立てておいて、その目的のために、作を道具に使えば無理ができるから、作の価値に影響を及ぼしてくるところに弊へいがある。——はたしてこうならば至極しごくごもつともであります。しかしあらかじめ胸中にある目的を立てるのと、作そのものを目的にするのとはこの場合において、そんなに判然たる区別はありません。刀は人を殺す道具であります。すると人を殺すという所作しよさくが目的になります。だから二つのものは全く違います。しかし斬きるといふ働きを考えたらばどうでしょう。方便でしょうか目的でしょうか。

刀を使うという方から云えば方便でありますが、殺す方から見れば、目的にもなりましよう。云い換えると、斬ると云う働きが一步進むごとに、殺すと云う目的が一步ずつ達せられるので、斬り了つた時に目的は終局に帰するのだからして、斬るのと殺すのはそう差違はありません。述作と述作の目的とは斬ると殺すくらいの差じやなろうかと思ひます。述作そのものを方便としたつて、方便と共に目的も修了せられる訳ではないでしょうか。少なくとも、今述べたような目的をもつてならば最初からその心得で述作に取りかかつて、ただ述作だけを目懸けて取りかかつて同じ事だと私は思つてるのであります。だから art for art 派でも、そうでなくつても 差支ない。要するに述作の目的は以上のように区別ができると云うのであります。

述作の二態度とその目的とするところは今申した通でありますが、ただ御注意までに一言しておきたいのは、こんな事があります。こう分けるとちよつと、一方に属するものは、他方に属してはならん。どつちか片づけて旗幟を鮮明にしなければ濟まないように見えるかも知れませんが、そう見えてはかえつて迷惑なので、すでに誤解を防ぐためカローリーネの例や馬琴の例をひいて、機会有あるたびに二三度弁じておきましたが、改めて御断わりを致しておきたいのは、真を写すものは純粹なる真のみを写してはけません。またおられ

んのであります。またいかに情緒に訴える人でも全く真を離れての叙述は——少なくとも長い叙述は——できないのであります。ズーデルマンのマグダと云う脚本をつい近頃になつて読みましたが、これはマグダという女が、父の意に悖つて、押しつけられた御簪さんを嫌つて、家を出奔した話であります。さて家を飛び出してから諸所を流浪する間に、ある男と親しい仲になつて、子を生んで、それからその男に棄てられます。男はマグダの故郷に帰つて、立派な紳士になりすましていると同時に、マグダは以太利で有名な唄い手になる。回り回つて故郷へ興行に来る。父母と和解する。ところが流浪中の不品行が曝露して、また騒動が起ろうとすると、昔し棄てた男が出て来て正當に婚儀を申し込む。ここめでたく市が栄えれば平凡極まる趣向であります。いざという間際になつて、聳になろうという男が昔の事——互の間に子があると云う事——だけは、今の身分にかかわるから、どうか公けにせずにおいてくれと頼む。マグダはここまでは納得したようなものの、そんな關係を内々にして夫婦になれるものかと大いに怒つて、どう頼んでも聞き入れない。父は御前が承知してくれないと、家の恥辱になる。いたずら娘を持つたと云われては、世間へ顔向けができない。妹だつて御前の身内だと云われては、誰も貰い手が無い。だから、どうか承知して男の云う事を承知してやれと逼る。マグダはどうあつても聞かない。父は

ついに憤死する。これが結末であります。この一段があるので、昔から見馴れた恋愛談の陳腐なものとは趣を異にするようになりますが、結婚問題が破裂するところがあればこそはあなるほどと云わせる事ができるのです。はあなるほどというのは取も直さず新らしかつたと云う意味であります。新らしい因果を見てもっともだ今の世の中にはこんな因果があるだろうと思うからです。今の人々の腹の中には行為にこそ、ここまで出さなくとも、約束的な姑息手段に堪えないで、マグダと同じような似たものが、あるだろう、あり得るはずだと認めるだけの眼をもつて読んで行くからであります。この点においてこの劇は固より真を發揮したものであります。しかしこの劇はそれだけよりほかに能事のないものであろうかと考えてみますと、大にあるでしょう。第一はこの相手の男の我儘なところ、過去の非を塗り潰して好い子になろうと云う精神が出ているから、読者はその点において憎悪とか軽蔑とかの念を起さなければならぬはずでしょう。しかし世の中は虚偽でも上部さえ形式に合っていれば、人が許すものだから、互の終りを全くして幸福を得ようとするには、過去の不品行を蔵すに若くはないという男の苦心を察して見ると多少は気の毒であります。どこまでも習慣的制裁を墨守して娘の恥を雪ぐためには、ともかくも公けに結婚させてしまわなければならぬと思ひ乱れる父親にも同情があります。最後に娘が一

徹つてつに、たとい世間からどう云われても、社会的地位を失つても、そんな俗習にお押しつけられて、偽わりの結婚をして、可愛い子をしょうがい生涯しょうがい日蔭かげものにするのはけっしていやだと、あくまでも約束的習慣に抵抗するところは、たといその情操に全然一致しない人までも、幾分か壮と感ずるでしょう。この数者があればこそ劇も面白くなるのでありますが、これは、みんな主観の方の情操であります。これで見ますと真だけの作と思つてたものに存外、他の分子が這はい入はいっている事が御分りになりましょう。これに反していかに主観的の作物でも全然真を含んでいないものはありません。もし含んでいなかったらとうてい読み得ないにきまつています。かの infinite longingですらこれを叙述する時には単あに呼あとか嗟あ乎あでは云いつくせないので、不足ながら客観的形相をかりてこれを髻ほうふつ髻ふつさせようとするのであります。それについてこんな話があります。これは小説ではありません。事実だとして、あるものに書いてありましたが、私は単に自分に都合のいい例として御話を致します。以い太たい利りのさるヴァイオリニストが旅行をして、しばらく、ポートサイドに逗とうりゆう留りゆうしておりました時、妙齡エジプトの埃及エジプトの美人みみせに見染められましたて親しき仲となつたそうでございます。ところがこの男は本国に許いいなすけ嫁なすけの娘があるので、いよいよ結婚の期せまが逼せまつた頃、ポートサイドを出帆して帰国の途に上りました。ところがその夜になると、船足で波が割れて長

く尾を曳ひいている上に忽こっぜん然とかの美人があらわれました。身体からだも服装ふくも透すき通とつており
 ますが、顔だけはたしかにその女だと分るくらいに鮮あざやかであります。ただ常よりは非常に
 蒼あおしろ白いのであります。この女が波の上から船の方へ手を伸のびして、舷ふなばたを見上げながら美うく
 しい声で唄うたをうたいました。それが奇麗きれいに波の上へ響くので、船の中の人はことごとく物もの
 凄すこい心持になりましたが、やがて夜が明けると共にかの美人はふつと消えました。やれ
 やれと安心しているとその晩またあらわれました。そうして手を伸のびして、首を上げて、波
 の上を滑すべつて、船のあとをつけて、いかにも淋しい声で、夜もすがら唄をうたいます。そ
 れから夜が明けると、またふつと消えます。そうして夜になるとまた出ます。そのうち船
 がとうとうネーブルスへ着きましたので、かの音楽家はそこで上陸致して、自分の郷里へ
 帰ると、手紙が来ております。差出し人はと見ると、ポートサイドにいる友人で、かねて
 自分と彼の女との間を知っているものでありました。すぐに開封して見ると、あの女は君
 が船へ乗つて出帆するや否や、海の中へぎぶぎぶ這はい入いって行って、とうとう行き方知れず
 になったとありました。——話はこれでおしまいです。私はこの話を讀むと何となく妙はたけな
 気分になりました。その気分が妙になるところにこの話の価値はあるのですから、どの畠はたけ
 のものであるかは分つております。しかし真には乏しい。実事物語としてかいてありまし

たが、どうもその方の価値は乏しい。真とか真でないと言う事は、たくさんの人の経験が一致して存在していると認めるか、また天下に一人でもいいからその存在を認めたものがあつて、これが真だと云つた時に、他のものがこれを認識しなくてはならぬものであります、また本人は真だと証明し得るものでなくてはなりません。出来得るものならば実験でも証明し得るものの方がたしかには相違ないのであります。ところがこの幽霊談になるとなかなか容易には証明できない。できるようになるかも知れませんが、今のところではまず嘘うそに近い方あります。しかしながら胸中の恋とか、なつかしさとか云うものは、たとい人に見せられないまでも、よし人が想像してくれないまでも、また好い加減に甲、乙、丙、丁のだれの胸の中にも存在しているんだらうぐらいに推察しているにもかかわらず、自分だけにとつてはこれほどたしかなものはありません。これほど切実な経験はありません。だからやつぱり真だろうと云われると、ごもつともと云わなければなりません。ただ自分に真なものすなわち人に真なものになつて、始めて世間に通用する真が成立するのだから、この切実な経験を誰が見ても動かすべからざる真にもり立てようとするには、これを客観的に安置する必要が起つて参ります。そこで私はこの演説の冒頭に自分の過去の経験も非我の経験と見倣みなす事ができると云つてあらかじめ予防線を張つておきました。刻下

の感じこそ、私の所有で、また我一人の所有であります。回顧した感じは他人のものであると申しました。少なくとも自分に縁故のもつとも近い他人のものとして取り扱う事ができると申しました。愛と云うと一字であります。自分の愛と人の愛と云えば、たとい分量性質が同じでもついに所有者が違つて参ります。愛の見当けんとうが違います。方角が違います。したがつて自己の過去の愛と他人の愛とは等しく非我の経験と見做し得ます。この点において主観的なる愛そのものを一步離れて眺める事ができます。ただ困る事は、時により場合により増減があつて、変化の度が著るしく眼につくんで、それがため客観的価値が大分下落致します。のみならず悲しい事には、いくら客観的に見る事ができても、客観的に写す事ができない性質のものであります。ある坊さんに、あなたちよつと魂を手の平へ乗せて見せておくれんかと云われて、弱つた人があります。これが私なら、魂と云う字を手の平へ書いて坊さんに見せてやろうと思ひます。それと同じ事で客観的に愛が見られるなら、客観的に愛を書いて見ると云われるなら、ただ愛とかいて見せません。甘いとか、辛いとか書くのと同じ意味で書いて見せます。白いとか黒いとかいう意味で書いて見せません。しかし愛の一字じゃいけないから、もつと長く分るように書いて見ると云われるなら、それじゃ小説でもかこうと申します。それが茶かすようで氣に入らなければ、そんな無理を

云わないで、誰その愛を書けと明瞭めいりょうに所有主を示して貰もらいたい、いくら僕が愛の客観的存在を認めても、ただの愛はかけない、根こぎにして引っこ抜いた愛だけはかけない、根こぎにして引っこ抜いた鉢はちうえ植かの松を描かけという難題と同じ事だからと云つてごめんこうむります。それじゃ主観の叙述はほとんどなくなる訳だとまたおっしゃるかも知れませぬが、前から何遍も申す通り無論あるところでは主観も客観も双方一致しているので、書き手の心持、読み手の心持で判ずるよりほかに手のつけようのない場合がいくらでもあります。だから形式の上ではついに要領を得なくなりません。しかしちょうど好い機会だから、今の幽霊の話を説明かたがたこの疑点をも明らかにしておきましょう。今申すごとくたとい愛の客観的存在を公認しても、これを叙述する時には、その愛の所有者と結びつけなければなりません。五官に訴え得るように取り扱わなければなりません。同時に愛を主観的の経験としてもやはり同様の手段に訴えなければなりません。しかしそれだから同じ事に帰着すると結論するのは少し誤つております。前の方は非我の事相のうちに愛を認めて、これを描びようしゆつ出しするので、後の方は私の愛を認めたる上、これを非我の世界に抛なげ出すのであります。すなわちその本位とするところは、我が味うところの愛という情操で、この無形無臭の情操に相応するような非我の事相を創設するのであります。非我の事相は

自然から与えられたもので、一厘も動かすべからずとして、その一分子たる愛を叙して来るのと、私の切実に経験する愛を与えられたるものとして、もっとも適当にこれを叙述せんがために、非我の事相を任意に建こんりゆう立するのとの差になります。したがって両者はある点において一致するのはもちろんであります。極端に至ると大に趣を異にするのであります。先ほど述べた幽霊の恋物語のようなものはその極端の例の一つだと思ひます。ここに、こんな切な恋がある。これをどう云いあらわしたらば、云い終おひせるかとの試問に応じて出来上った答案と見なければなりません。世の中へ出て行って、どんな恋があるか探索して来いと云う命令に基もとづいた、報告書と見ては見当が違います。したがって客観的価値の少ないものができたのであります。真と認められないものになりました。だからこの話を聞くと、マグダの結末ほどには、はあなるほど、こうもあろうとか、こうあるかも知れないねと云う気にはなりません。しかしながらその代りに、ごもつともだ、こうもあつたいね、こうあれかしだと云う気にはたしかになれます。あれかしと云う語は裏面に事実じやないと云う意味を含んでおりますから、つまりは嘘だと云う事に下落してしまひます。この下落が烈はげしくなるとどうてい読めなくなります。馬鹿馬鹿しくなります。例たとえば今の話しでも、もし船のあとを跟つけるものが、幽霊でなくつて、本当の女が、波の上をあるい

て来て、ちよいと、あなたとか何とか云つて手招ぎでもしたらそれこそ奇蹟きせきになります。

幽霊ならば、有るとも無いとも証明ができないだけで済みますが、生きた人間が波の上を歩いては明かに自然の法則を破っております。いくら、かくあれかしと思つたつて、冗じょう

談だんじやない、おのろけも好い加減にした方がよからうと申したくなります。人を馬鹿に

するにもほどがあらあね、まるで小供だと思つていやがると本を抛なげ出すかも知れません。

(西遊記、アレビヤン・ナイト、もしくはシェーヴィング・オブ・シヤグパットのような

ものの面白味は別問題として論じなければなりません) して見ると私が前段に申した意味

が自おのずから御明瞭になりましたろう。すなわちいかな主観的な叙述でも、ある程度まで真を

含んでおらんと読みにくいものである、そう截せつ然ぜんと片つ方づけられるものじやないと云

う事であります。この幽霊のごときは極端の極端の例であるから、積極的に真を含んでお

らんと云えましようが、むやみに真を打ち壊しているものでないと云う事だけは、さき

の説明で明らかであります。しかも読んで馬鹿馬鹿しくならんのは全くそのお蔭であ

る以上は、真の分子がいかに叙述の上に大切であるかが分るであります。

客観、主観、両態度の目的と関係はほぼ説ときつくしましたから、これから両者の特性に

ついて少し述べたいと思います。すでに両者の関係やら目的を述べる際にも自然の勢で、

不知不識しらずしらずの間にこの問題に触れているのはもちろんでありますから、その辺は御斟酌ごしんしゃくの上御聞を願います。

さて客観的態度から出た句もしくは節、もしくは章、大きく云えば一篇——そう純粹に行くものでないのはたいてい御分りになりましたろうが、まああると仮定して——それからかの歴史的に發達した自然派写真派——これも厳密に議論したら純粹のものが、あるかどうか存じませんが、まああるとして、この二派をこの方面に編入しておいて論じます。もつとも自然派も写真派も、真本位ではないと主張されると、それまでで、やめにするだけであります。または真本位だけれど御前のいわゆる真じやないと云われると、やっぱりやめにしなければなりません。がたいていのところ、真の解釈は折合がつきそうに思いますし、かつ歴史を眼中に置かないで立てた私の議論と、全く歴史的に起つた流派とを、結びつけられれば、結びつけて考えますと、大分諸君にも私にも興味があるからこう致したので、よしや自然派や写真派がこの部門から脱走致しても、私の議論はやっぱり議論になるだろうとは思われまます。そこでこの部門の主要な目的は前に申すごとく真を發揮するに存する事は別に繰り返す必要もございませぬ。すでに真が目的である以上は好悪こうおの念を取りのけなければなりません。取捨と云う事を廢よさなくつてはなりません。と云うと諸君

はこうおつしやるかも知れない。真が目的なら真を好むのだろう、よし好まないまでも、偽を悪むにく訳だろう。真を取り偽を棄すてるのは自然の数すうじやないか。なるほどそうであります。しかし文字の上でこそ真偽はありますが、非我の世界、すなわち自然の事相には真偽はありません。昨日は雨が降った、今日は天気になった。雨が真で、天氣が偽だとなると少し、天氣が迷惑するように思われます。これを逆にして、それじや雨の方が偽だと云つても、雨の方が苦情を云うだろうと思えます。だから大千世界の事實は、すでにその事實たるの点においてことごとく真なのであります。この事實は真だから好きだ、この事實は偽だから嫌きらだと、どうしても取捨はできない訳であります。真偽取捨の生ずる場合は、この客觀の事相を写し取った作物そのものについてこそ云われべきものであります。詳しく云えば、傍觀者がこの作物を自然そのものと比較するとき、もしくは甲の作と乙の作とを自然を標準として対照する時に始めて真偽ができ、取捨ができ、好悪が生ずるのであります。だから客觀的態度で叙述した詩文には偽があるかも知れません、またあるはずであります。けれども客觀的態度で向う世界には、偽は始めから存在しておらん、少なくとも真だけだとしなければ、最初から真の価値を認めないと同様の結果に陥おちります。だからいやしくも真を本位として筆をとる以上は好悪の念を挟はさむ余地がない事になります。したが

って取捨はないと一般に帰着致します。たとえば隣りに醜くい女がいる。見ても厭いやになるとおっしゃる。それはどうでも御随意でありましようが、いくら醜くつても何でも現まにいるものはいるに相違ありません。醜みにくいから戸籍に載せないと云つた日には、区役所の調べはまるで当あたにならない事になります。偽いつはりりになります。気に喰くわない生徒だからと云つて点数表から省はぶいたら、学校ほど信用のできない所はなくなるでしょう。して見ると、真まを写す文字ほど公平なものはない。一視同仁の態度で、忌憚きたんなく容赦なく押しに行くべきはずのものであります。ブルンチエルがバルザックを論じたうちにこんな句があります。自然派作家には、蛆うじよりも象の方を大切だと考える権利がない。もちろん生物學上の発達から云つたら、象の方が重要な位地を占めているかも知れないが、何もこれは自然派作家が自分の意志で随意に重要にした訳ではない。——面白い句であります。(ブルンチエルのバルザック論はもちろん一人の著者についての議論でありますから系統的に理論は述べてありませんが、こういう点に關してはなほだ有益の参考書でありますから御一読を願ねがいます。この取捨のない意味なども、実はバルザック論のところにあるのを私が、纏まとめて布ふ衍えんして行くくらいなものであります。この人は同書にまた、我が、浪漫派、抒情主義などと云う字を使つて説明をしております。しかし二者を截せつ然ぜん區別のあるごとく論じて

いるのが欠点かと思われず。――すでに公平無視の立場でありますから、問題の撰せん択たくがない。撰せん択たくがないと云うのは、意識界に落つるものがことごとく焦点になつてしまふと云う訳ではありません。意識界のどの部分も比較的自由に焦点になり得ると云う意味であります。毛け嫌げんをしないけいと云う事であります。あるものだけに注意が向いて、その他には頑がん強きやうの抵抗があつて、気が向けられないというような状態におらない事を指すのであります。だからもう一つ言葉を換えて云うと叙述すべき事相に自己の評価を与えて優劣の差別をつけないと云う事にもなります。例たとえば美うくしとい女にと差さし向むいになる。――ありがたい。――女にが恋この物語をする。――嬉うれしい。――ところで急いに女にが欠あくび伸をする。――と急いに厭いやになる。厭いやになつたからと云つて、そこだけ抜きにしてしまつたら、抜ひかしただけが事實じに叶かなわなくなる。しかし事實じを書くからには、真まを写しすと云うからには、いたずらに好悪こうあくの念ねんだけで欠伸けんを棄すてべきものではないはずであります。真まに妨たげなきものとして略りやくすところ云うべきであります。また別の例れいを挙あげて見みますと、ここに一人の医者いしやがあります。ある患者びやうの病症びやうを確たしかめるために検けん尿にょうをやる、あるいは検便けんべんをやる。わきから見るとずいぶんきたない話わであります。しかし本人ほんは別べつに留意れいする気色きしきもなく、熱心ねつしんに検査けんをする。尿になり便べんなりの成分せいぶんを確たしかめるまでは是非せいやります。もし、きたないから好い

加減いかげんにしてやめると云う医者があつたらそれこそ大変であります。医者の職分を忘れたものであります。医者ばかりではありません、学者でもそうであります。動物学者が御苦労にも泥溝どぶの中から一滴の水を取つて来て、しきりに顕微鏡で眺めています。たくさん虫が見えるでしょう。しかしみんな裸体に違ない、のみならず時々はいかがわしい状態をするかもしれない。覗のぞき込んでいる動物学者がこの有様を見て、いやこれは大変だ風紀に害があるから、もう研究をやめよう。と云う馬鹿もないでしょうが、あつたらどうでしょう。非常に道徳心の高い動物学者には相違ないでしょうが、しかし真理の研究者としてはほとんど三文の価値もないと申さなければなりません。文学者もその通りかと存じます。真を目的とする以上は、真を回避するのは卑怯ひきょうであります。露骨に書かなければなりません。大胆きたんに忌憚きたんなく筆を着けなくつては、真に対して面目のない事になります。(この点において善、美、壮に対する情操と時々衝突を起す事は文芸の哲学的基礎において述べましたし、前段においても一方が強くなると、一方が弱くなる事実を例証しましたから御記憶を願います)けれども真に向つて進む人が必ずしも好悪のない人とは申されません。真に向つて進む間だけ好悪の念を脱却するのであります。尿を検査する医師がいつでも尿むとんに無頓着じやくとは受け取れません。無頓着ならば食卓の上に便器があつても平然として食事がで

きるはずであります。虫の交尾するところを研究する動物学者だって、虫以外の万事までにその態度を応用する勇氣はないでしょう。ただ真を研究する時だけ他を忘れ得るほどに真に熱中するのであると解釈しなければなりません。真を写す文学者もこの医者や動物学者と同じ態度で、平生は依然として善意に拘泥し、美醜に頓着し、壮劣に留意する人間である事は争うべからざるの事実であります。柳は緑、花は紅、そのほかに何の奇があると云います。しかし実際はこう素気ない世の中ではありません。柳に舟を繫ぎたくなったり、花の下で扇を翳したくなるのが人情であります。

そこでこう云う事が起ります。真を描く文学は、真を究めさえすればよろしいとなる。その結果他の情操と衝突しても、まあ好いとします。——読者の方では好いとしないかも知れませんが——しかしながら真は取捨なき事相であります。公平の叙述であります。好悪の念を離れたる描写であります。したがって褒貶の私意を寓しては自家撞着の窮地に陥ります。ことに作以外の実際において、約束的にせよ善に与し悪を忌み、美を愛し、醜を嫌うものが、単に作物の上においてのみ矛盾を逆まにして悪を鼓吹し、醜を奨励する態度を示すのは、ただに標準を誤まるのみならず、誤まった標準を逆に使用している点において二重の自殺と云われても仕方がありますまい。書籍を買う条件で国から為替を取

り寄せて、これを別途に支弁するからが、すでに間違っているのに、使い道もあろうに身を持ち崩すために使い果したとあつては、申し訳が立つ立たないの段ではありません、頭のない人だと云われても仕方があるまいと思ひます。幸い今日の日本には、こう云う作家は見当りませんが、自然派の趨勢一つでは、向後この種の作物がいつ何時あらわれて来ないとも限りませんから、御互に用心をしたら善かろうと存じていささか愚存をつけ加えました。

真を写す文学の特性はほぼこれで明瞭になりましたから、進んで善、美、壯を叙してこれに対する情操を維持しもしくは助長する文学の特性に移ります。しかしこれは前段と相待つて分明になるべき關係のものでありますから、私の申し上げべき事の影法師はすでに諸君の御認めになつたはずであります。すなわち客觀的態度の公平なるに對して、この態度の不公平——不公平と云うとおかしく聞えますが、好悪に支配せられる事でありませぬ。意識の幅の一方所だけが焦点にならなくてはならないのが原則で、この焦点は注意できまるのでありますから、もし好悪が注意に關係するとすれば、好悪のはげしいものには注意が余計集まる訳になります。したがつて好悪が焦点を支配致します。さてこの意識の内容を紙へ写す際には好は好、悪は悪で判然と明瞭に意識された事でありませぬから、勢

い悪の方すなわち嫌きらひな事、厭いやなもの、は避けるようになるか、もしくはこれを叙述するにしても嫌いなように写します。厭だと云う意味が分るようにして写します。最後には自己の好きなもの、面白いものを引き立てるための道具として写します。したがって叙述が評価的叙述になります。もつとも評価はあらわでない含蓄の場合が多いかも知れませんが、ともかくも好悪こうおの両面を記述して、しかも公平に記述すると云う事は、あたかも冷熱の二性を写して、湯と水を同一視しろと云う注文と同じ事で、それ自身において矛盾がありません。もし双方を叙する以上は勢い評価せねばならぬ事となります。のみか、たとい好きな方面だけを撰えらぶにしても、撰ばれたものがことごとく一様の価値として作者の眼に映らない以上は、やはり表向きでも、内々でもいいから、評価のあらわれるようにしなければなりません。この意味で（差等をつけると云う意味）、この種の文学ではブルンチェルのいわゆる無取捨と云う事が不可能になるのであります。撰せん択たくと云う事が、あながちに甲はとる、乙は捨てると云う意味だと思ふと誤解が生じやすうございますからちよつと弁じておきました。こう云う性質の文学であるからして、この種の文学には、真を写す文学に見出し難い特徴が出て参ります。すなわち作物を通じて著者の趣味を洞察する事ができると云う便宜べんぎであります。もし我々の趣味がいわゆる人格の大部を構成するものと見み做なし得る

ならば、作を通して著者自身の面影おもかげを窺うかがう事ができると云つても差さし支つかないであります。それで著書の趣味が深厚博大であればあるほど、深厚博大の趣味があらわれる訳になりますから、えらい人がこの種の文学をかいて、えらい人の人格に感化を受けたいと云う人が出て来て、双方がぴたり合えば、深厚博大の趣味が波動的に伝つて行つて、一篇の著書も大いなる影響を与える事ができます。しかし個人に重きを置かない社会にあつては、ヒーローを首肯うけがわない世においては、自他の懸隔けんかく差等を無視する平等觀の盛んな時代においては、崇拜畏敬の念を迷信の残り物のごとく取り扱くう国柄くにがらにおいては、思うほどの効果の出て来ないのもちろんであります。したがつて著作家は立派な趣味を育成したり、高尚な嗜好しこうを涵養かんようしたり、通俗以上の氣品を修得する事が不必要になつて参ります。つまりは事相に対する評価を、世間が著作家に対して要求しないからであります。御前方は真相を与えればいい、評価の方はこちらで引き受けるからと云う読者ばかりになるからであります。我々の知りたいのは事実である、著者は事実を与える媒介者ばいかいしゃとして、重きを置く必要はあろうが、著者自身の人格や、趣味や、評価は、かえつて迷惑だと云う読者ばかりになるからであります。迷惑は聞えておりますが、迷惑と感じる人が、各々自己に相当の評価的標準を具して、その標準で評価しつつ作に向うか向わないかが疑問であ

ります。もし向わないとすると、（全然この態度を滅却する事は不可能であります、もし真を本位として著作に向うと、思ったよりも評価的神経は遲鈍になります）その結果は人間がだんだん不具になります。自己の趣味は——趣味のない人は全然ありませんが——同趣味のものと、接触するために、涵養を受けるので、また異趣味のものに逢着するのために啓発されるので、また高い趣味に引きつけられるがために、向上化するのであります。そうして世の中の運転は七分以上この趣味の発現に因るのでありますから、この趣味が孤立して立枯れの姿になると、世の中の進行はとまります。とまらない部分は器械のように進行するのみであります。「誰さんは金が欲しいために、奥さんを離別しました」「そうか、それも一つの事実さね」「あの男は芸者を受け出すために泥棒をしたそうです」「はあ、それも一つの事実さね」「誰さんは、ちつとも約束を守らないで困りますよ」「なるほどそれも一つの事実だね」——こう事実すくめで、ひどい奴だとも感心な男だとも思わなかった日には、懐手をして、世の中を眺めているだけで、善にも移らないし、悪をも避けないし、壮拳をも企て得ないし、下劣をも恥じないし、花晨月夕の興も尽きはてようし、夫婦としても、朋友としても、親子としても、通用しない人間になるでしょう。

ここまで来て、気がついて見ると、客観、主観両方面の文学には妙な差違が籠こもつてお
 ます。純じゆんこ乎として真のみをあとづけようとする文学に在あつては、人間の自由意思を否定
 しております。たとえばここに甲があつて、ある憤いきんりの結果、乙を殺す。罪を恐れて逃げ
 る。後悔して自殺する。と仮定すると、憤りが原因で人を殺して、人を殺したのが原因で、
 罪を恐れるようになって、それがまた原因になって、後悔して、後悔の結果ついに自殺し
 た事になりますから、かくのごとく層々発展して来る因果の纏てん綿めんは皆自然の法則によつ
 てできたものと見なければなりません。殺すのも、恐れるのも、悔ゆるのも、自殺するの
 も、けつして当人が勝手にやった訳ではない。殺して見ると、厭いやでも応でも恐れなくつち
 やいられなくなり、恐れると、どんなに避けようとしても悔恨の念が生じ、悔恨の念は是
 非共自殺させなければやまないように逼せまつて来る。この階段を踏んで死ななければならな
 いような運命をもつて生れた男と見倣みなすよりほかに致し方がなくなります。さつき用いた
 言葉で分るように申しますと、この男の所作しよさは評価を離れたものになります。毀誉褒貶きよほうへんの
 外に立つべき所作であります。柳は緑花は紅流の死に方であります。したがって人殺しを
 した本人を責める訳にも、自殺をした本人を褒ほめる訳にも参らなくなります。もし責める
 なら自然を責めなくつてはなりません。褒めるにしても自然を褒めるより致し方がなくな

ります。人間に義務を負わせる代りに、神か何か義務を負わせなければならなくなりま
す。ところが情操を本位とする文学になると、好悪こうおがあり、評価があるんだから、篇中人
物の行為は自由意志で発現されたものと判じてかからなければならぬ。右へも行ける。
左へも行ける。のに彼は右を棄すてて左へ行つた。だから、えらいとなります。感心だとな
ります。彼自身の意志の働らきで、やった行為であればこそ、その行為者に全部の責任を
負わせる事ができ、できるからその責任者たる当人が責められる資格もあり、また褒ほめら
れる資格もあるのです。もし自分がやったんじゃない、因果いんがの法則がしでかしたの
だと、たかを括くつていたら、行為そのものに善悪その他の属性を認め得るにしても、行
為をあえてしたる本人には罪も徳もない訳になります。こうなつて来ると人間の考が大分
違つて来なければなりません。自分は自然に生みつけられて、自然の命ずる通りをやるん
だから、罪を犯しても、悪を働らいても仕方がない。恨うらんでくれるな、嫉ねたんで貰うまいと
落ちて来る。だから大きな顔をして、不都合な事を立ちふるまうようになるでしょう。そ
れでは御互が迷惑する。社会が崩くずれて来る。文学の目的が直接にこの弊へいを救うにあるかど
うかは問題外としても情操文学がこの陥かんけつ欠を補う効果を有し得る事はたしかであります。
しかもこの情操の供給を杜絶すれば、吾人に大切な涵養かんようぶつ物を奪われたると一般で日に日

に瘦せ果てるばかりであります。

両種の文学の特性は以上のごとくであります。以上のごとくでありますから、双方共大切なものであります。けつして一方ばかりあれば他方は文壇から駆逐してもよいなどと云われるような根柢の浅いものではありません。また名前こそ両種でありますから自然派と浪漫派と対立させて、畳を堅うし濠を深こうして睨み合つてるように考えられますが、その実敵対させる事のできるのは名前だけで、内容は双方共に往つたり来たり大分入り乱れております。のみならず、あるものは見方読方ではどっちへでも編入のできるものも生ずるはずであります。だから詳しい区別を云うと、純客観態度と純主観態度の間に無数の変化を生ずるのみならず、この変化のおのおのものと他と結びつけて雑種を作ればまた無数の第二変化が成立する訳でありますから、誰の作は自然派だとか、誰の作は浪漫派だとか、そう一概に云えたものではないでしょう。それよりも誰の作のこの所はこんな意味の浪漫的趣味で、この所は、こんな意味の自然派趣味だと、作物を解剖して一々指摘するのみならず、その指摘した場所の趣味までも、単に浪漫、自然の二字をもつて単簡に律し去らないで、どのくらいの異分子が、どのくらいの割合で交つたものかを説明するようにしたら今日の弊が救われるかも知れないと思ひます。今日の日本の批評は山県は長州

人だ大山は薩州人だというような具合に傾いていはしないかと考えられます。それよりも山県はこんな人、大山はこんな人と解剖しました綜そうこう合する方が二元帥を評する適當の方法かと存じます。それでも長州薩州は地図の上で動かすべからざる面積を持っておりまうから、まだ混雑が少ないようですが、歴史の流を沿うて漂いついた二派は名前は昔の通りですが内容は始終しじゆう變つておりますからなお不都合であります。だから、もし作物を本位としないで、主義を本位とするならば主義の意義を確然と定めて、そうしてその主義のもとに、その主義に叶う局部かな（作物の）を排列して、この主義の実例とするが適當だろうと思ひます。一つの作物と、一つの主義をアイデンチフワイしなければ気がすまないような考は是非共改める事に致したいと思ひます。これから先き文学上の作物の性質は異分子の結合でいよいよ複雑になつて参りますから、幾多の變態を認めなければならぬのは無論の事であります。したがつて、二三の主義を終古一定のものとして、万事をこれで律せんとするのみならず、律せんとする尺度の年々に移り行くのを咎とがめないのは、将来出現の作家には不便宜の極で、かつ批評家の無責任を表白するものではないかと存じます。

客観、主観両面の目的、特性、必要、關係等はほぼ述べ終りました。以上は大体の御話であります。固もとより普遍的の論で一般に通ずる説とは信じますが、今日の日本においてい

ずれが比較的必要かと云うと、少しは特別の問題になりますから、この点を一応調べた上、演説の局を結ぼうかと思ひます。情操文学の目的は情操を維持し、啓発し、また向上化するにあるとは私の前に述べた通りであります。さて与えられたる情操は与えられたる事相に附着しております。たとえば孝と云う情操は親子の關係に附着しております。ところが親子の關係は社会上複雑な原因からして、わが日本では著るしく變つて参りました。この關係が変われば、孝と云う情操の評価もしだいに變らなければならぬ訳になります。しかるに旧來の親子關係に附着したままの評価を与えて、孝を叙述していると、在來の孝心を維持するか、もしくは不孝のものを啓発するか、または一層孝心を深くするための叙述になります。今日は孝の時代でないから親を粗末にして好いと誰も云うものはありませんが、昔のように絶対的評価をつけて叙述するのは、どうでありましょう。孝と云う字は現に勅語にもあつて大切な情操には相違ございませんが、昔日のように親が絶対的權威を弄する事を社會の有様が許さない以上は、多少その辺に注意を払つた適度の評価をしなければなりません。もしこれを在來のまままで絶対評価をもつて叙述すると時勢後れになります。せつかくの目的が達せられなくなります。昔は親のために身を苦海に沈めるのを孝と云つたかも知れない。今日の我々から見ても孝かも知れないが、よし娘が拒絶したつて、

事柄ことがらが事柄だから不孝とは思いますが。それだけ孝の評価が下落したのであります。これを西洋人に云わせると、頭からてんで想像し得られないと云います。西洋へ行くと孝の評価がまた一段下がるのであります。こういう風に評価が變つて行くのはつまるところ、前に云つた社会状態の変化に基もとづいた結果にほかならるのでありますから、この状態の変化を知りさえすれば、旧來の評価を墨守する必要がなくなります。これを知らねばこそ煩はんも悶もんが起つたり矛盾が起つたりして苦しむのであります。こういう時に誰か眼の明きらかな人が、この状態の変化を知らせる、——すなわち客觀的に叙述すれば、読者ははあなるほどと思うので、大変な解脱げだつになります。(こんな単純な場合では解脱にもなりますまいが、まあ例ですからそのつもりで御聞きを願います)それで読む人はありがたがる。書く人は成功する。ばかりじやない、傍はたから見ても、旧來の評価を無理に維持しようとする情操文学よりも必要の度が多いでしょう。

次に日本では情操文学も揮真文学も双方發達しておりませんのは、いくら己惚うぬぼれの強い私も充分に認めねばなりません、昔から今日こんにちまで出版された文学書の統計を取つて見たら、無論情操文学に属するものが過半であります。のみならず作物の価値から云つてもこの系統に属する方が優まさつているようであります。それは當然の事で客觀的叙述は觀察

力から生ずるもので、観察力は科学の発達に伴って、間接にその空気に伝染した結果と見るべきであります。ところが残念な事に、日本人には芸術的精神はありあまるほどあったようですが、科学的精神はこれと反比例して大いに欠乏しておりました。それだから、文学においても、非我の事相を無我無心に観察する能力は全く発達しておらなかったらしいと思います。くどくなりますから、例も引きませんが、これだけで充分御合点ごがてんは参るだろうと存じます。これを別方面の言葉で云うと、子はみんな孝行のもの、妻は必ず貞節あるものと認めていたらしいのであります。だから芝居でも小説でも非常な孝行ものや貞節ものが、あたかも隣り近所に何人でもいるかのごとき様子であらわれて参るのみならず、見物や読者もまた実際にいくたりでも存在しているうちの代表者だと云わぬばかりの顔つきで、これに対していたのであります。いたのでありますと云うと私が元禄時代から生きていたように当たりますが、どうもそうに違いないと思います。あんな芝居や書物を見る人は、真面目まじめに熱心に我を忘れて釣り込まれていたに違いないでしょう。それでなければ今日まで伝わる前にとくに湮滅いんめつしてしまうはずであります。そうすると、ある御嬢さんは朝顔になったり、ある細君は御園になったり、またある若旦那わかだんなは信乃や権八の気でいたんでしよう。そりや満足でしょう。自己の情操を満足させるといふ点から云ったら満足に違な

い。自分ばかりじゃない、自分の子や女房や夫をこんなものだと考えていたら定めし満足に違いない。もつともあの時代に出てくる悪党はまた非常なものでどうてい想像ができないような悪党が出て来ますが、これは善人を引き立てるためなんだから、こちらには誰もなろうと志願するものはないから安心です。それじゃ善と悪の混血児あいのこはというとほとんど出て来ないんだから、至極しごく単簡たんかんで重宝であります。こう云う訳で一家町内芝居へ出てくるような善人で成り立っていたのであります。それじゃ天下太平なものでありそうなのに、やっぱり夫婦喧嘩ふうふうげんかも兄弟喧嘩もありました。あつたに違なかというと、まあ思うのです。しかもこの喧嘩が彼らが完全なる善人であつたと云う証しょうこ拠こになるから、不思議であります。ちとパラドックスになり過ぎますが、およそ喧嘩のものは御互を完全の人間と認めて、さやってみると案外予期に反するから起るのであります。だから喧嘩をするためには理想が必要であります。次にこの理想と実際とは一致しているものだと認める事が必要であります。今日も喧嘩は毎日ありますが、何も理想的人物でないから癪しゃくに障さわるといふような野暮ぼは中学生徒のうちにも、まあないようまで至極便利になりました。その代り人間の相場はいささか下落致したようなものの結句こつちが住み安いかのように存ぜられます。ところが旧幕時代には、みんな理想的人物をもつて目され、理想的人物をもつて任じていたので

ありますから、大變窮屈でございましたらう。何ぞと云うと、町人のくせになかと胸打などを喰います。女房のくせに何だむやみにふくれてなどとやされます。子供のくせに何だ親に向つて口答をしてなどとやり込められます。とかく何々のくせにと、くせが流行した世の中であります。癖はの流行はる世の中ほど理想の一定した世の中はないのであります。町人はかくあるべきもの、女房はかくすべきもの、子供はかく仕えべきものと、杓子しゃくし定ぢやう規ぎで相場がきまつております。もつともこれは双方合意の上でなければ成立しない訳でありますから、町人の方でも、子供の方でも、女房の方でも、どんな理想的人物をもつて予期されても、立派にその予期を充みたすつもりでいたのであります。したがって自分は天下一の孝行者で、天下一の貞女で、天下一の町人——は、ちとおかしいが、何しろ立派なものと同得ていたんでしよう。この己惚うぬぼれていれば世話はない。たいていの事が否応いやおうなしに進行します。万事が腹の底で済んでしまいます。それで上部うわべだけでも理想通りの人物を標ひょう榜ぼう致ちします。ちと偽善になるようですが、悪徳の天眞てんしん瀾らん漫まんよりは取り扱いやすいから結構です。中には腹の底で済んだなときえ気がつかないでいるものもたくさんあつたそうです。

この有様で御維新まで進んで参りました。それから科学が泰西から飛んで参りました。

今日^{こんにち}まで約四十年立つたので、大分趣が變つて参りました。科学の訓練を経た眼で、人を見たり、自分を見たりする事が大分流行^{はや}つて参りました。しかしこの精神が一般に行き渡つていないため、かつはあまり大切でないため今日まであまり進歩しておりません。なぜ大切でないかと考えて見ると面白いのであります。自分で自分の腹の中を検査して見ると、そう自慢になる事ばかりはありやしません。自分ながらあさましい事もたくさん出て来ます。しかしいくら浅間しいものが見当つた見当つたと云つて触れて歩いたつて、自分の恥になるばかりで、あまり発明家として尊敬を払つては貰えません。だからせっかく発見しても黙つてる方が得策であります。骨を折つて、探がし当てて、自分一人で氣持をわるくして、そうして苦^{にが}い顔をして塞^{ふさ}いでいるのも、あまり景氣のいいものでもありませんから、つい遠慮^{ぶさた}が無沙汰になりがちで、吾身で吾身が分つたような、分らないような心持でその日その日とぶらついております。こうしていれば、いつまで己惚れていたつて、變事が起らない限りは大丈夫、己惚れつづけに己惚れて死ねますから、せっかく土をかけた所を掘り返して腐^{しかい}つた死骸^{しかい}をふんふん嗅^かいで見るなんて、むく犬の所作^{しよさ}をするには及ばん仕儀になります。私もその一人であります。私の妻もその一人であります。折々はあれでも令夫人かと思ふ事もありますから、向うでも、あれがわが郎君かと愛想をつかす事もあ

るんでしよう。それでも私は立派な夫おつとのつもりですましていますから、奥方の方でも天下の賢妻をもつて自任しておられる事と存じます。かようの己うぬぼれ惚は存外多いもので、諸君まで私共の仲間へ引き入れるのは恐縮でありますが、なるべく勢力範囲を拡張しておく方が勝手でありますから、遠慮のないところを申しますと、滔とうとう々たる天下皆然りと申しても差さしつかえ支さないかも知れません。腹の奥の方では博士を宛にしていながら、口の先では熱烈な恋だなどと云うのがあります。そうかと思つて持参金が欲しいような気分を打ち消して、なにあの令嬢しゆくとくの淑徳しゆくとくを慕うのさとすまじきつています。それで偽善でも何でもない、両方共真面目まじめだから面白いものです。そこで我々のような観察力の鈍いものは、なるべく修養の功を積んで、それから、大胆な勇猛心を起して、赤裸々せきららなところを恐れずに書く事を力つとめる必要が出て参ります。

それでは今日の文学に客観的態度が必要ならば、客観的態度によつて、どんな事を研究したらよかろうと云う問題になります。私は私の氣のついた数力条を御参考のために述べ、結末をつけます。

第一は性格の描写についてであります。これは小説とか劇とかに必要なもので、作家がこの点において成功すれば、過半の仕事はすでに結了したものとまで思われております。

そこで俗に成功した性格とはどんなものかと調べて見ると活動の二字に帰着してしまします。またどう考えてもこの二字以外には出られないように思います。しかし、活動にもいろいろあるがいかなる意味の活動か一口に云えるかと聞かれると、少し臆断過ぎるようですが、私はこう答えても差支ないと考えます。普通の小説で、成功したものと称せられている性格の活動は大概矛盾のないと云う事と同一義に帰着する。これを他の言葉で云いますと、ある人が根本的にあるものを握っていて、千態万状の所作にことごとくこのあるものを応用する。したがって所作は千態万状であるが、これを奇麗に統一する事ができる。しかもこれを統一するとこのあるものに落ちてしまう。なお言い換えると、描写された性格が一字もしくは二三字の記号につづまってしまふ。勇気のある人、親切な人、吝嗇りんしやくな人と云った風に簡単になる、すなわち覚えやすくなる。まあ、こんなものではなからうかと思えます。つまりは、一篇の小説に一定の意味があつて、この意味を一句につづめ得るのを愉快に思うように、同じく一句につづめ得る性格をかき終せたものが成功したような趣が大分あります。しかしこの意味で成功した性格は、個人性格の全面を写し出したものではありません。(特別の場合を除いては)個人の全面性格のある顕著な特性を任意に抽出ちゆうしゆつして、抽出しただけを始めから終まで貫ぬかして、作家にも読者にも都

合のいい性格を創造したものであります。しかも自然の法則に従って創造したものでなくって、小説の世界に便宜べんぎを与うるために、ある程度まで自然の法則を破って、創造したものであります。普通の場合において、個人の性格中のある特性が、その個人の生しょう涯がいを貫ぬいている事は事実であります。がこの特性だけで人物が出来上っておらん事も事実であります。のみか、この特性に矛盾反対するような形相をたくさん備えているのが一般の事実であります。だから諺ことわざにも近侍の眼から見れば英雄もまた凡人に過ぎずと申します。極めて簡単で例にならんほどの例でありますが、人事には大変冷淡な人が、健康だけには恐ろしく神経過敏に見える事があります。家族には無愛想極まっても朋友ほうゆうにはこの上なく丁寧ていねいな男もございます。こう云う点を詳しく調べてみたらば、あるいは矛盾のある方が自然の性格で、ない方が小説の性格とまで云われはしますまいか。

そこで小説家、戯曲家うちでもこの点に注意し出して、ついに矛盾の性行をかくようになりしました。そうして読者もこれを首肯するようになりました。柔順であつた妻君が、ある事情のもとに、急に夫おつとに反抗して、今までに夢想し得なかつた女丈夫になるといふような例であります。しかしこれは在来の叙述を一步複雑の方面へ進めたものに過ぎません。と云うのは、明かに矛盾した特性をことさらに並べて、対照の結果読者の注意をこの二焦

点に集注するからであります。だから性格の複雑という事だけを眼中に置いて見ると、これはまだまだ単調のものであります。だからあくまでも客観的に性格の全局面を描出しよ
 うとすれば、今までの小説や戯曲にあらわれたよりも遥かに種々な形相が出て来る訳であ
 ります。そうして形相が異なるに従つて、相互の間に一致がないように見えて来るのは、
 やむをえぬ結果であります。したがつて描写が客観的に微妙であればあるほど、纏まりが
 つかぬ性格ができやすいでしょう。一言にして蔽う事のできない性格になりやすい、記憶
 に不便な性格になりやすいでしょう。要するに大変できのわるい、下手にかいた性格のよ
 うに見えてくるでしょう。従来のかき方は、ここに風邪を引いた人があるとすると、その
 人の生涯を通じて、風邪を引いた部分だけを抜き抜いて書くのですから、分りやすく
 明瞭になる代りにははなはだ単調にして有名なる風邪引き男が創造されてしまします。
 本来を云うと病気の時と、丈夫な時と、病気でも丈夫でもない時と三通りかいて、始めて
 その人の健康の全局面が、あらわれると云わなければなりません。しかし、そうすると、
 どうしても散漫に見えます。要領を得ないように見えて来ます。風邪でもこの通りですが、
 性格はこれよりも遥かに複雑であります。例えばAなる性格の第一行為をA1とすると、
 A1からして類推のできるA2A3A4を順次に描出して行けば、全局面は無論出て来な

い。たいていは一特質の重複に近くなります。もしA1A2A3A4が因果の法則で連結されておつて、この諸行為の内容に密接な類似を示すときは、重複が変じて発展となりま
す。発展ではあるがA1が基点であつて、そのA1は全性格の一特性であるからして、A
1の発展もまた全性格の発展と見倣みなす訳には参りません。私はこの種の重複でも発展でも
文学上価値のないものと断言するのではないのですが、そちらはすでに大分ある事だから、
全性格の描写と云う方に客観的態度をもつて少しく進んでみたら開拓の余地がたくさんあ
るだろうと思います。その代りに在来の小説を読んだ眼から見れば、散漫になります、滅裂
になりやすいです、または神秘的に変わらましよう。しかし吾人が客観的描写に興味を有し
てくると、漸々ぜんぜんこの散漫と滅裂と神秘を妙に思わないような時機が到着しはせまいかと
思われます。言葉を換えて云うと形式の打破をある程度まで意に留めなくなりはせまいかと
と考えるのです。しかし一応は御断りを致しておきます。吾々の世界はすでに冒頭におい
て述べた通り撰せん択たくの世界であります。光線にしても、音響にしても、一定の振動数以上
もしくは以下のものは、見る事も聞く事もできない有様でございます。性格の全部と云つ
たところで、全部がことごとく観察され得るとは申しません。無論比較的と云う文字を挿そ
入うして御考を願うよりほかに致し方がありません。それから客観的態度で時間の内容

を写して行くと（ある一物につき）この連続が因果いんがになるには相違ありませんから、いくら散漫でも滅裂でも神秘でも因果を離れるとは申されません。ただその因果が、因果の律にまとめられるほどに、経験上熟知されていらないから、散漫で滅裂で神秘と見るまでの事であります。だからこの種の因果の経験を繰くり返かえして、その中から因果の律を抽象する事ができると同時に、散漫は統一に帰し、神秘は明白になります。（性格の描写に関連して研究の価あるのはムードの観察であります。ムードの描写は昔の小説にはほとんどないと思います。しかもこのムードから面白い行為が出て、たしかに興味のある結果を生じます。ムードと性格の関係その他は今述べません。また述べられるだけに頭が整っておりません）

性格の解剖については、心理状態の解剖であります。最も性格と関係があるのは無論であります。一言にして云うと今日の人の心的状態は昔むかの人の心的状態より大分複雑になつておりますからして、同一の行為でも、その動機が遙はるかに趣を異ちがにしている訳で、そこを観察したら、充分開拓の余地があると申す意味でございませぬ。例たとえばここに一人の男があつて人殺しをする。なぜ人殺しをしたかと云うに人殺しが目的ではない、ほんの方便で、人殺しをしたあとの心持ちを痛切に味わつてみたいというような芸術家が出て来た

するならば——まだあんまり出ないようですが——どうでしょう。いくら説明したって元禄時代の人物には分らないにきまつている。というものはこの男の人殺しに対する評価は、人殺しから生ずる自己の心裏しんりの経験に対する評価より遙かに相場が安いのであります。平たく云えば人殺しと云う事をさほどわるく思っていない。のみならずわざと罪を犯しておいて、犯したあとの心持を痛切に味わうというような込みいった考えはどうてい大石良雄や室鳩巢むろきゆうそうなどに分るものではありません。もちろん今の人にも分らんかも知れませんが、今の人ならばほぼ想像はつきますから、それまで複雑なのに違ありません。また恋と云う一字でもこの頃になると恋という一字では不充分なくらい種類ができはしまいかと思われまます。すでに沙翁さおうのかいたものでも分けければ幾通りにも分けられる恋が書いてあります。近代に至るとその区別がますます微細になりはせぬかと思われまます。ゴンクールゴンクールの書いたラフォースタンと云う小説のなかにはこんなのがあります。有名な女優があつて、この女優がある英国の貴族と懇懃いんぎんを通じたままそれぎり幾年か音信不通の姿でおりまして、今、貴族の方では急に親が死んで、莫大ぼくだいの遺産を相続するよう都合になつたので、今は結婚その他の点についても何人も喙くちばしを挟む事のできない身分でありますから、多年恋着していた婦人を正式に迎えるのはこの時と云うので、狂うばかりに喜んで、仏蘭西フランス

へ渡りますと、女の方も固もとより深い仲の事でありましたから、泣いて分れたその日の通り大事に男の事を思いつづけていた折で、無論異存のあるはずはございません。めでたく結婚致します。それだけだとこれも陳腐ちんぷなのですが、これから先が山であります。さて結婚をしてみると夫の方では金に不足のない身ではあるし、女房を女優にょゆうにしておくのは何となく心配ですから、もう廃業したら善かろうと云う相談を持ちかけます。ところが細君の方はもともと役者が性しょうに合っている訳なんだからかどうか分りませんが、何となく廃やめたくなかつたのであります。しかし可愛い男の云う事だから、厭いやな心を抑えて亭主の意に従います。それから二人で非常な贅ぜい沢たくをやりませう。嬉しい中でいっしょになって、金を使いたいだけ使うんだから、幸福でなければならぬはずですが、そこが妙なもので、細君が女優をやめてからというものは何となく気色が勝すぐれなくなりませう。いくら夫が機嫌きげんをとつても浮き立ちませぬ。と云つて固もと々もと憎にくい男ではないんだから粗略にする訳はない。しんそこ夫の事はいとしく思つているのであります。ただ心が陽気になれないだけなのですが、夫の方では最愛の細君の一顰いっぴん一笑いっしょうも千金より重い訳ですから、捨ておかれんと云うので慰藉いしやかたがた以太利イタリーへ旅行に出かけます。しかるに男は出先で病気に懸かかります。細君は看病に怠りはございませんが、定業じょうごうはしかたのないものでどうとう死んでしまいます。

その死ぬ少し前に例の通り細君が看病のため枕辺へ寄り添いますと、男はいつになく荒々しい調子で、手をもつて細君を突き退けるばかりに、押し返して、御前は ひつきよう 必 竟 芸術家だ。本当の恋はできない女だと云うのです。それが結末であります。御前は必竟芸術家だ。本当の恋はできない女だ。これが一種の恋であります。有名なルージンの恋も普通一般の恋ではありません。ルージン一流の恋であります。ズーデルマンの書いたフェリシタスの恋などはもつとも特色を帯びた一種の恋のように思えます。これが日本の昔であつてみると、大概似たもののように見えます。八重垣姫の恋も、やえがきひめ 御駒才三の恋も、おそめひさまつ 御染久松の恋も、まあ似たり寄つたりであります。なぜ似たり寄つたりかという、異種類の恋はなかつたと解釈する事もできます。また、観察力が鈍かつたからだと断定する事ができますが、まず両方と見ておきましょう。がまずぎつと、こんな訳でありますから、かように複雑になりつつある吾々の心のうちをよく観察したら、いろいろ面白い描写ができる事だろうと思えます。

あまり長くなりますから、あとはなるべく手短かに指摘して通り過ぎるくらいに致します。次には、人生の局部を描写して、これを一句にまとめ得るような意味を与える事でありま。落語家のいわゆる落ちをつけた小説のようなものになります。これは近頃大分流

行致しておりますから、別段布衍ふえんする必要もございません。ただ御注意だけに留とどめておきます。前の例などもここに応用ができます。「御前は必竟芸術家だ。本当の恋はできない」これが一篇の主意の落着するところであります。ただし落ちを取る目的は綜そうごう合にあるので、前の二カ条は解剖が主でありますから、目的の方角は反対になります。だからちよつと区別しておきました。

次には、人生において、容易に注意を払っておかなかつた現象、したがって滅めつた多たにない事という意味にもなりますが、この方面にも大分新しい材料がある事と思われまふ。この間友人からこんな話を聞きました。その男の国での事ではありますが、ある芸げい妓しやがある男と深い関係になつていたのでさうで。その兩人がある時船遊びに出ました。そこいらを漕こぎ廻つた末、都合のいい磯いそへ船をもあいまして、男が舟を棄すてて岸へ上りました。ところが岸边に神社か何かあると見えて、磯からすぐに崖がけになつて、崖のなかから石段が海の方へ細長くついております。男はその石段を登つたんださうです。女は船のなかから、石段を上つて行く男の後姿を見ていたさうです。その後姿を見ていた時、急に自分の情夫に愛想をつかしてしまつたんだと友人は話しましたが、その原因は私にも、友人にも、本人の芸者にも無論分りません。これと類似の例をゼームスの宗教的経験と云う本や、スター

バックの宗教心理学で見た事がありますが、個人の経歴譚けいれきたんとして聞いたのはこれが始めてであります。これはあまり突飛な例かも知れませんが、こんな経験で文学の形になってあらわれておらないものが大分あるだろうから、そういう研究をしたら材料はずいぶん出て来はすまいかと思っております。

このほか因果の關係で人の気につかなかつた事やら、類型を脱した個性をかく方面やいろいろあるだろうと思いますが、この三四力条は理論上これこれに分れると云うのでなくつて、ただ思いついた事を列ならべたまでであります。どこで切つても同じ事でありませうからこれでやめておきましょう。しかし今日の吾邦わがくにに比較的客觀態度の叙述が必要であると云う事は、向後何年つづく事が明らかには分りません。西洋では illuminationイリミネーション が盛さかんに行われた、十八世紀の反動として十九世紀の前半に浪漫的趣味の勃興ぼつこうを来きたしました。それが変化してまた客觀的態度に復して参りました。二十世紀はどうなるか分りません。この二潮流が押しつ押しされつしているうちに、つまりは両方が一種の意味において一様に發達して参ります。そして發達した両方が交り合つて雜種の雜種というようなものが、いくらでもその間に起つて参ります。右へ行つたり左へ寄つたりするのは、つまり態度だけの話で、この態度から出る叙述はけつして繰くり返かえされるものではありません。どこか變つて

参ります。杜撰ずさんながら自分の考では、世間一般の科学的精神が、情操の勢力より比較的強くなつて、平衡を失いかけるや否や、文壇では情操文学が隆起して参りますし、また情操の勢力が科学的精神を圧迫するほどに隆起してくると、客観文学が是非とも起つて参る訳だと考えます。文壇はこの二つの勢力が互に消長して、平衡を回復し、回復するかと思うと平衡を失して永久に発展するものでありましよう。であるから同時同刻にせよ西洋の文学にあらわれた態度が、必ず日本の態度の模範になる理由は認められません。前段に申した今日吾邦わがくににおける客観文学の必要とは、我邦現在の一般の教育状態からして案出した愚考に過ぎないのであります。しかしながら、やはり同一の立場から見ても、ほとんど純客観に近い態度の文学を必要と認めるほど情操の勢力は社会を威圧しているようには思われませんから、いたずらに客観にのみ重きを置く文学は不必要に近いように思われます。維新後今日までの趨勢すうせいを見ますと、猛烈なる情操に始まつて四十年間しだいに情操の降下を経験しておりますから、現時はまだ客観に重きを置く方を至当と存じますが、向後日清戦役もしくは日露戦争のごとき不規則なる情操の勃張ぼつちやうを促うながす機会なく日本の歴史が平静に進行するときには、情操は久しからずして科学的精神の圧迫こうむを蒙る事は明らかでありますから、情操文学は近き未来において必ず起るべき運命をもっている事と存じます。

ただし未来の情操文学はいかなる内容をもつて、いかなる評価をなすやに至っては固^{もと}より測^{はか}りがたいのはもちろんであります。それまでに発展した客観描写を利用してこれを評価の方面に使うのは争うべからざる運命と存じます。これを結末の一句としてこの講演を終ります。

——明治四十一年二月東京青年会館において述——

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

※底本で、表題に続いて配置されていた講演の日時と場所に関する情報は、ファイル末に地付きで置きました。

入力：柴田卓治

校正：大野 晋

2000年8月24日公開

2004年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

作家の態度

夏目漱石

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>